

マトフエイに因る聖福音

第一章　一ダワイドの子、アウラムの子、イイスス、ハリストスの族譜。ニアウラムはイサアクを生み、イサアクはイアコフを生み、イアコフはイウダ及び其兄弟を生み、三イウダはファマリに因りてファレス及びザラを生み、ファレスはエスロムを生み、エスロムはアラムを生み、四アラムはアミナダフを生み、アミナダフはナアツソンを生み、ナアツソンはサルモンを生み、五サルモンはラハフに因りてワオズを生み、ワオズはルフィに因りてオワイドを生み、オワイドはイエッセイを生み、六イエッセイはダワイド王を生み、ダワイド王はウリヤの妻に因りてソロモンを生み、七ソロモンはロワオアムを生み、ロワオアムはアワイヤを生み、アワイヤはアサを生み、ハアサはイラサファトを生み、イラサファトはイララムを生み、イララムはオ ज्याを生み、九オ ज्याはイラアフアムを生み、イラアフアムはアハズを生み、アハズはエゼキヤを生み、一〇エゼキヤはマナツシヤを生み、マナツシヤはアモンを生み、アモンはイラシヤを生み、一一イラシヤはイラアキムを生み、イラアキムは、ワワイロンに徙さるる前、イエホニヤ及び其兄弟を生み、二ニワワイロンに徙されし後、イエホニヤはサラファイイリを生み、サラファイイリはゾロワエリを生み、一三ゾロワエリはアワイウドを生み、アワイウドはエリアキムを生み、エ

リアキムはアゾルを生み、一四アゾルはサドクを生み、サドクはアヒムを生み、アヒムはエリウドを生み、一五エリウドはエレアザルを生み、エレアザルはマトファンを生み、マトファンはイアコフを生み、一六イアコフはイオシフを生み、即ちマリヤの夫なり、マリヤよりハリストスと稱ふるイイススは生れたり。一七是くの如く世を歴ること、アウラムよりダワイドに至るまで十四代、ダワイドよりワワイロンに徙さるるに至るまで亦十四代、ワワイロンに徙されしよりハリストスに至るまで又十四代なり。一八イイススハリストスの生ること左の如し、其母マリヤイオシフに聘せられて、未だ婚せざる先に、聖神に由りて孕めること見れたり。一九其夫イオシフは義人にして、之を顯にせんことを欲せず、私に彼を離さんことを望めり。二〇然れども此の事を思へる時、視よ、主の使夢に彼に現れて曰へり、ダワイドの子イオシフよ、爾の妻マリヤを納るることを懼るる勿れ、蓋其内に孕まれし者は聖神に由るなり、二一彼は子を生まん、爾其名をイイススと名づけん、彼其民を其罪より救はんとすればなり。二三凡そ此の事の成りしは、主が預言者を以て言ひし所に應ふを致す、曰く、二三視よ、童女孕みて子を生まん、其名はエムマヌイルと稱へられん、譯すれば神我等と偕にするなり。二四イオシフ寐より起きて、主の使の彼に命ぜし如く行ひ、其妻を納れたり。二五唯未だ室を同じくせざるに、其冢子を生むに迫り、則ち其名をイ

イススと名づけたり。

第二章　一 イイススは、イロド王の時、イウデヤのワイフレエムに生れしに、視よ、博士數人東よりイエルサリムに來りて曰く、二 生れたるイウデヤ人の王は何處に在るか、蓋我等其星を東に見たれば、彼を拜せん爲に來れり。三 イロド王之を聞きて心騒げり、イエルサリム擧りて亦然り。四 乃凡の司祭長と民間の學士とを集めて、彼等に問へり、ハリストスは何處に生るべきか。五 彼等曰へり、イウデヤのワイフレエムに於てす、蓋預言者に因りて斯く録されたり、六 云く、イウダの地ワイフレエムよ、爾はイウダの諸群の中に於て聊も小しとせず、蓋爾より我が民イスライリを牧せんとする君は出でんと。七 是に於てイロド密に博士を召し、詳に星の現れし時を問ひ、ハ彼等をワイフレエムに遣して曰へり、往きて、細に嬰兒の事を尋ね、之に遇はば、我に告げよ、我も往きて彼を拜せん爲なり。九 彼等王に聞きて往けり、視よ、嘗て東に見たる星は彼等に先だちて行き、遂に嬰兒の在る所に至りて、其上に止れり。一〇 彼等星を見て喜に勝へざりき。一一 乃家に入りて、嬰兒の其母マリヤと偕に在るを見、俯伏して彼を拜し、其寶盒を啓きて、之に禮物を獻じたり、即黄金、乳香、沒藥なり。一二 既にして夢の中に、イロドに返る可からずとの默示を得て、他の途より其本地に歸れり。一三

彼等の歸りし後、視よ、主の使夢にイオシフに、現れて曰く、起きて、嬰兒と其母とを攜へて、エギペトに奔り、彼處に在りて、我が爾に告ぐるを待て、蓋イロドは嬰兒を索めて、之を殺さんと謀る。一四 彼起きて、夜間嬰兒と其母とを攜へて、エギペトに往き、一五 彼處に在りて、イロドの死するに至れり。是れ主が預言者を以て言ひし所に應ふを致す、云く、我吾が子を召してエギペトより出せりと。一六 當時イロドは己が博士に欺かれたるを見て、大に怒り、人を遣して曾て詳に博士に問ひし時を按り、ワイフレエム及び其四の境内なる二歳以下の嬰兒を盡く殺せり。一七 是に於て預言者イエレミヤの言ひし事應へり、云く、一ハラマに悲み哭き甚しく號ぶ聲は聞ゆ、ラヒリは其子の爲に哭きて、慰むるを欲せず、子の無きが故なりと。一九 イロドの死せし後、視よ、主の使エギペトに於て夢にイオシフに現れて二〇 曰く、起きて、嬰兒と其母とを攜へて、イスライリの地に往け、蓋嬰兒の生命を索むる者は死せり。二二 彼起きて、嬰兒と其母とを攜へてイスライリの地に來れり。二三 唯アルヘライが其父イロドに繼ぎて、イウデヤに王たりと聞きて、彼處に往くことを懼れ、乃夢の内に默示を得て、ガリレヤの境に往き、二三 ナザレトと名づくる邑に來りて、此に居りたり、諸預言者を以て、彼はナゾレイと稱へられんと、言はれし事に應ふを致す。

第三章 一 彼の日授洗イオアン來り、イウデヤの野に於て教を宣べて二曰く、悔改せよ、蓋天國は邇づけり。三 此の人は、乃預言者イサイヤの言ひし者なり、曰く、野に呼ぶ者の聲ありて云ふ、主の道は備へ、其徑を直くせよと。四 イオアンは駱駝の毛衣を衣、腰に皮の帶を束ね、蝗蟲と野蜜とを其食とせり。五 當時イエルサリムと、全イウデヤと、イオルダンの四方と出でて、彼に就き、六 己の罪を認めて、イオルダンに於て彼より洗禮を受けたり。七 イオアンはフアリセイ及びサツドウケイ等の多く其洗を受けん爲に來るを見て、之に謂へり、蝮の類よ、誰か爾等に將來の怒を避くることを示したる、八 然らば悔改に合ふ果を結べ、九 自ら意ひて、我等の父はアウラムなりと云ふ勿れ、蓋我爾等に語り、神は此の石よりアウラムの爲に子を興すを能す、一〇 既に斧も樹の根に置かる、凡そ善き果を結ばざる樹は斫られて、火に投げられん、一一 我水を以て爾等に洗を授けて悔改せしむ、然れども我の後に來る者は更に我より強し、我其屢を堤ぐるに堪へず、彼は聖神及び火を以て爾等に洗を授けん、一二 其箕は其手に在り、彼は其禾場を淨めて、其麥を倉に斂め、糠を滅えざる火に燬かん。一三 厥時イイススガリレヤよりイオルダンに來り、イオアンに就きて、之より洗を受けんと欲す。一四 イオアン彼を止めて曰く、我爾より洗を受くべきに、爾我に就くか。一五 イイスス答へて彼に謂へり、今姑く許せ、蓋我等は是くの如く凡の義を盡す

べし。是に於て之を許せり。一六 イイスス洗を受けて、直に水より上れるに、視よ、天彼の爲に開け、神の神鴿の如く降りて、其上に臨むを見たり、一七 且天より聲ありて云ふ、此は私の至愛の子、我が喜べる者なり。

第四章 一 當時イイスス神に導かれて野に適けり、惡魔に試みられんとするなり。二 既に齋せしこと四十日四十夜にして、遂に飢ゑたり。三 試みる者彼に就きて曰へり、爾若し神の子ならば、此の石に命じて餅と爲らしめよ。四 彼答へて曰へり、録せるあり、人は唯餅のみを以て生くべきに非ず、乃凡そ神の口より出づる言を以てすと。五 其時惡魔は彼を攜へて聖なる城に至り、彼を殿の頂に立たしめて六 言ふ、爾若し神の子ならば、自ら下に投ぜよ、蓋録せるあり、爾の爲に其天使に命ぜん、彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に蹶かざらしめんと。七 イイスス之に謂へり、亦録せるあり、主爾の神を試みる勿れと。八 惡魔復彼を攜へて、最高き山に至り、世界の萬國と其榮華とを示して、九 彼に謂ふ、爾若し俯伏して我を拜せば、悉く之を爾に與へん。一〇 其時イイスス之に謂ふ、サタナ、我より退け、蓋録せるあり、主爾の神を拜せよと、獨彼のみに事へよと。一一 是に於て惡魔彼を離る、視よ、天使等就きて、彼に奉事せり。一二 イイススはイオアンが囚はれたりと聞きて、ガリレヤに去れ

り、二三ナザレトを離れて、ザワウロン及びネフアリムの境の内なる海濱のカペルナウムに來りて、此に居りたり、一四預言者イサイヤを以て言はれしことに應ふを致す、一五曰く、ザワウロンの地、ネフアリムの地、海濱の路にイオルダンの外に在る異邦のガリレヤ、一六幽暗に坐する民は大なる光を見、死の地及び陰に坐する者に光は輝けりと。一七是よりイイスス始めて教を宣べて曰へり、悔改せよ、蓋天國は邇づけり。一八ガリレヤの海邊を行く時、彼は兄弟二人、即シモン稱してペトルと曰ふ者、及び其兄弟アンドレイが、網を海に施せるを見たり、蓋彼等は漁者なりき。一九乃彼等に謂ふ、我に従へ、我爾等を人を漁する者と爲さん。二〇彼等直に網を遺して、之に従へり。二一彼處より往きて、別に兄弟二人、即ゼウェデイの子イアコフ及び其兄弟イオアンが、父ゼウェデイと偕に舟に在りて、網を補へるを見て之を召せり。二三彼等直に舟と父とを遺して、之に従へり。二三イイスス徧くガリレヤを巡りて、其諸會堂に於て教を傳へ、天國の福音を宣べ、民間の諸の病諸の疾を醫せり。二四彼の聲名徧くシリヤに揚れり、人凡の患へる者、種種の病及び痛楚を負へる者、魔鬼に憑らるる者、癩癩の者、癲癲の者、カポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオルダンの外より衆くの民彼に従へり。

第五章 一イイスス群衆を見て、山に登れり、既に坐せしに、其門徒彼に就けり。二彼口を啓きて、之を教へて曰へり、三神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。四泣く者は福なり、彼等慰を得んとすればなり。五溫柔なる者は福なり、彼等地を嗣がんとすればなり。六義に飢え渴く者は福なり、彼等飽くを得んとすればなり。七矜恤ある者は福なり、彼等矜恤を得んとすればなり。八心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。九和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。一〇義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。一一人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を諷りて諸の惡しき言を言はん時は、爾等福なり、一二喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり、蓋人は是くの如く爾等より先なりし預言者を窘逐せり。一三爾等は地の鹽なり、若し鹽其味を失はば、何を以て其鹹に復さん、後復用ある所なく、唯外に棄てられて、人に踐まれんのみ。一四爾等は世の光なり、山の上に建てる邑は隱る能はず。一五人燈を燃して、之を斗の下に置かず、乃燈臺の上に置く、然らば凡そ家に在る者に照る。一六是くの如く爾等の光は人人の前に照るべし、彼等が爾等の善き行を見て、天に在す爾等の父を讚榮せん爲なり。一七我律法或は預言者を毀たん爲に來れりと意ふ

勿れ、我が來れるは之を毀つに非ず、乃之を成さん爲なり。一八
蓋我誠に爾等に語り、天地の廢するに至るまでは、律法の一
一畫も廢せずして、盡く成らん。一九故に此の至と小き者の
一を毀ち、且是くの如く人に教へん者は、天國に於て至と小き者
稱へられん、唯之を行ひ、且教へん者は、天國に於て大なる者と稱
へられん。二〇蓋我爾等に語り、若し爾等の義は學士及びフアリ
セイ等の義に勝らざれば、爾等天國に入るを得ず。二一爾等古の人
に言へるあるを聞けり、殺す勿れ、殺す者は審判に干らんと。二三然
れども我爾等に語り、凡そ故なくして、其兄弟を怒る者は審判に干
らん、其兄弟に愚拙よと曰ふ者は公會に干らん、狂妄よと曰ふ者
は火の地獄に干らん。二三故に爾若し禮物を祭壇に攜へ至り、
彼處に於て爾の兄弟の爾と隙あるを憶ひ起さば、二四爾の禮物を
祭壇の前に置き、往きて、先づ爾の兄弟と和ぎ、後來りて、爾の
禮物を獻ぜよ。二五爾を訴ふる者と偕に猶途に在る時、急に之
と和げ、恐らくは訴ふる者爾を裁判官に付し、裁判官爾を下吏
に付して、爾獄に投ぜられん。二六我誠に爾に語り、爾毫釐だ
に償はずば、彼より出づるを得ず。二七爾等古の人に言へるあ
るを聞けり、淫する勿れと。二八然れども我爾等に語り、凡そ慾を懷
きて婦を見る者は、心の中己に之と淫せしなり。二九若し爾の右
の目爾を罪に誘はば、抉りて之を棄てよ、蓋爾が百體の一を失

ふは、全身地獄に投ぜらるるより勝れり。三〇若し爾の右の手爾を
罪に誘はば、斷ちて之を棄てよ、蓋爾が百體の一を失ふは、
全身地獄に投ぜらるるより勝れり。三一又言へるあり、若し人其妻を
出さば、之に離書を與ふべしと。三二然れども我爾等に語り、淫の故
に非ずして其妻を出だす者は、之に姦淫を行はしむるなり、出され
たる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。三三又爾等古の人に言へる
あるを聞けり、誓に背く勿れ、乃爾の誓を主の前に守れと。三四
然れども我爾等に語り、一切誓ふ勿れ、天を指して誓ふ勿れ、是
れ神の寶座なればなり、三五地を指して誓ふ勿れ、是れ其足の躋なれ
ばなり、イエルサリムを指して誓ふ勿れ、是れ大王の城なればなり、
三六爾の首を指して誓ふ勿れ、爾一縷の髪だに白く或は黒くす
る能はざればなり。三七爾等の言は是是是否否たるべし、此に過ぐ
る者は惡よりするなり。三八爾等言へるあるを聞けり、目を以て目
を償ひ、齒を以て齒を償へと。三九然れども我爾等に語り、惡に敵
する勿れ、乃人爾の右の頬を批たば、他の頬をも之に向けよ。四〇
爾を訴へて、爾の裏衣を取らんと欲する者に、外服をも取ること
を聽せ。四一人爾を強ひて、偕に一里を行かしめば、之と偕に二里
を行け。四二爾に求むる者には與へ、爾に借らんと欲する者を卻
くる勿れ。四三爾等言へるあるを聞けり、爾の隣を愛し、爾の敵
を憎めと。四四然れども我爾等に語り、爾等の敵を愛し、爾等を詛

ふ者を祝福し、爾等を憎む者に善を爲し、爾等を虐げ、爾等を窘逐する者の爲に禱れ、四五 天に在す爾等の父の子と爲らん爲なり、蓋彼は其日を悪しき者と善き者の上に照し、雨を義なる者と不義なる者の上に降らす。四六 蓋爾等若し爾等を愛する者を愛せば、何の賞かあらん、税吏も是くの如き事を行ふに非ずや、四七 爾等若し爾等の兄弟にのみ安を問はば、何の過ぎたることを爲さん、異邦人も是くの如く行ふに非ずや。四八 故に爾等純全なること、爾等の天の父の純全なるが如く爲れ。

第六章 一 爾等慎みて、人に見られん爲に、施濟を其前に爲す勿れ、然らずば天に在す爾等の父より賞を獲ざらん。二 故に施濟を爲す時は、偽善者が人より榮を得ん爲に、會堂及び街衢に於て爲すが如く、己の前に篋を吹く勿れ、我誠に爾等に語り、彼等は己に其賞を受く。三 爾施濟を爲す時、爾が左の手に爾が右の手の爲す所を知らしむる勿れ、四 爾の施濟の隠ならん爲なり、然らば隠なるを鑿みる爾の父は顯に爾に報いん。五 爾禱る時、偽善者の如くする勿れ、彼等は人に見られん爲に、會堂及び街衢の隅に立ちて禱る事を好む、我誠に爾等に語り、彼等は己に其賞を受く。六 爾禱る時、爾の室に入り、戸を閉ちて、隠なる處に在す爾の父に禱れ、然らば隠なるを鑿みる父は顯に爾に報いん。七 又禱る時、異邦人の如く贅語

を曰ふ勿れ、蓋彼等は言の多きを以て聽かれんと意ふ。八 彼等に効ふ勿れ、蓋爾等の父は、爾等が願はざる先に、爾等の需むる所を知る。九 故に爾等是くの如く禱れ。天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、一〇 爾の國は來り、爾の旨は、天に行はるるが如く、地にも行はれん、一一 我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、一二 我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、一三 我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ、蓋國と權能と光榮は爾に世世に歸す。「アミン」。一四 蓋若し爾等人に其過を免さば、爾等の天の父は爾等にも免さん、一五 若し人に其過を免さずば、爾等の父も爾等に過を免さざらん。一六 又爾等齋する時、偽善者の如く憂はしき容を爲す勿れ、蓋彼等は、其齋の人に顯れん爲に、顔色を損ふ、我誠に爾等に語り、彼等は己に其賞を受く。一七 爾齋する時、首に膏ぬり、面を洗へ、一八 爾の齋の人に顯れずして、隠なる處に在す爾の父に顯れん爲なり、然らば隠なるを鑿みる爾の父は顯に爾に報いん。一九 爾等の爲に財を地に積む勿れ、此處には蠹と銹と損ひ、此處には盜穿ちて竊む。二〇 乃爾等の爲に財を天に積み、彼處には蠹と銹と損はず、彼處には盜穿ちて竊まず。二一 蓋爾等の財の在る所には、爾等の心も在らん。二三 身の燈は目なり、故に若し爾の目淨からば、爾の全身明ならん、二三 若し爾の目悪しからば、爾の全

身暗からん。故に若し爾の中の光は暗たらば、則暗は如何にぞや。二 四人は二人の主に事ふる能はず、蓋或は此を惡み、彼を愛し、或は此を重んじ、彼を輕んぜん、爾等は神と財とに兼ね事ふる能はず。二五 故に我爾等に語ぐ、爾等の生命の爲に何を食ひ、何を飲み、爾等の身體の爲に何を衣んと慮る勿れ、生命は糧より大にして、身體は衣より大なるに非ずや。二六 試に天空の鳥を觀よ、彼等は稼かず、穡らず、倉に積まず、而して爾等の天の父は之を養ふ、爾等は彼等より甚貴きに非ずや。二七 且爾等の中誰か慮りて、其身の長一尺だに延ぶるを得ん。二八 衣の爲に何ぞ慮る、試に野の百合の如何にか長ずるを觀よ、勞かず、紡がず、二九 然れども我爾等に語ぐ、ソロモンも其榮華の極に於て、其衣猶此の花の一に及ばざりき、三〇 今日在り、明日爐に投げらるる野の草にも、神は斯く衣すれば、況んや爾等をや、小信の者よ。三一 故に慮りて、我等何を食ひ、或は何を飲み、或は何を衣んと云ふ勿れ、三二 蓋此れ皆異邦人の求むる所なり、爾等の天の父は此等の者の皆爾等の必要なるを知る。三三 爾等先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等の者皆爾等に加はらん。三四 故に明日の事を慮る勿れ、蓋明日は自ら己の事を慮らん、一日の心勞は一日の爲に足れり。

第七章 一人を議する勿れ、議せられざらん爲なり、二 蓋爾等何の議を以てか人を議せば、亦是くの如く議せられん、何の量を以てか人に量らば、是くの如く爾等にも量られん。三 爾何ぞ兄弟の目に物屑の在るを視て、己の目に梁木の在るを覺えざる、四 或は己の目に梁木の在るに、如何ぞ爾の兄弟に告げて、我に物屑を爾の目より出だすを容せと曰はん、五 僞善者よ、先づ梁木を己の目より出せ、其時如何に兄弟の目より物屑を出すべきを見ん。六 聖物を犬に與ふる勿れ、爾等の真珠を豕の前に投ぐる勿れ、恐らくは彼等其足にて之を踐み、且轉じて爾等を噬まん。七 求めよ、然らば爾等に與へられん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん、八 蓋凡そ求むる者は得、尋ぬる者は遇ひ、門を叩く者には啓かれん。九 爾等の中孰か其子餅を求めんに、之に石を與ふる者あらん、一〇 又魚を求めんに、之に蛇を與ふる者あらん。一一 然らば爾等惡しき者なるに、尚善き賜を其子に與ふるを知る、況や天に在す爾等の父は、之に求むる者に善き物を與へざらんや。一二 故に凡の事、人の爾等に行はんを欲する者は、爾等も是くの如く之を人に行へ、蓋律法と預言者とは即是なり。一三 窄き門より入れ、蓋沈淪に導く門は闊く、其路は寬くして、之に入る者多し、一四 唯生命に導く門は窄く、其路は細くして、之を得る者少し。一五 謹みて僞の預言者を防げ、彼等は羊の衣にて爾等に來れども、内は殘き狼なり、

一六 爾等其果に由りて彼等を識らん、豈荆棘より葡萄を摘み、或は
蒺藜より無花果を採らんや。一七 是くの如く凡そ善き樹は善き果を結
び、悪しき樹は悪しき果を結ぶ、一八 善き樹は悪しき果を結ぶ能はず、
又悪しき樹は善き果を結ぶ能はず。一九 凡そ善き果を結ばざる樹は、
斫られて火に投げらる。二〇 故に爾等其果に由りて彼等を識らん。二
一 凡そ我に主よ、主よ、と謂ふ者は、必しも天國に入るに非ず、唯天
に在す我が父の旨を行ふ者は入らん。二三 彼の日、多くの者我に謂
はん、主よ、主よ、我等爾の名に由りて預言し、爾の名に由りて魔鬼
を逐ひ、爾の名に由りて多くの異能を行ひしに非ずやと。二三 其
時我彼等に告げて曰はん、我嘗て爾等を識らざりき、不法を作す者我
を離れよと。二四 故に凡そ我が此の言を聞きて之を行ふ者は、我之
を磔の上に其家を建てたる智き人に譬へん。二五 雨降り、河溢れ、風吹
きて其家を撞ちたれども、倒れざりき。磔の上に基けたればなり。
二六 凡そ我が此の言を聞きて之を行はざる者は、沙の上に其家を建
てたる愚なる人に譬へられん、二七 雨降り、河溢れ、風吹きて其家
の衝きたれば、倒れたり、且其倒は大なりき。二八 イイスス此等の
言を竟りし時、民其訓を奇とせり、二九 蓋彼等を教へしこと權あ
る者の若し、學士及びフアリセイ等の如きに非ず。

第八章 一 彼山を下りしに、衆くの民彼に隨へり。二 視よ、癩病の

者來りて、彼を拜して曰へり、主よ、爾若し望まば、我を潔むるを能
す。三 イイスス手を伸べて、之に觸れて曰へり、我望む、潔まれ、
其癩病直に潔まれり。四 イイスス之に謂ふ、慎みて人に告ぐる勿
れ、乃行きて、己を司祭に示せ、且モイセイの命ぜし禮物を獻じ
て、彼等に證を爲せ。五 イイススカペルナウムに入りし時、百夫
長彼に就きて、求めて曰へり、六 主よ、私の僕癩瘋にて家に臥し、苦
むこと甚し。七 イイスス彼に謂ふ、我往きて之を醫さん。八 百夫
長對へて曰へり、主よ、爾が私の舎に入るは、我當らず、唯一言
を出せ、然らば我が僕愈えん、九 蓋我人の權に屬すれども、我が下
に兵卒ありて、我此に往けと云へば往き、彼に來れと云へば來り、我
が僕に是を行へと云へば行ふ。一〇 イイスス之を聞きて奇と爲し、
從ふ者に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、イスラエリの中にも、我是
くの如き信を見ざりき。一一 我又爾等に語ぐ、衆くの者東より西よ
り來りて、アウラム、イサク、イアフと偕に天國に席坐し、一
二 而して國の諸子は外の幽暗に逐はれん、彼處には哀哭と切齒とあ
らん。一三 イイスス又百夫長に謂へり、往け、爾の信ぜし如く爾
に爲るべし、斯の時其僕愈えたり。一四 イイススペトルの家に來り
て、其岳母の熱を病みて、臥せるを見たり、一五 其手に觸れたれば、
熱即退けり、婦起きて彼等に供事せり。一六 日暮るるに及びて、
魔鬼に憑らるる多くの者を彼に攜へ來れるあり、彼言を以て惡鬼を

逐おひ出いだし、亦また病やまひある者ものを悉ことごとく醫いせり。一七 預よげん言しや者しやイサイヤを以もつて言いはれし事ことに應かなふを致いたす、云いはく、彼かれは我われ等らの恙つがを任になひ、病やまひを負おひたりと。一八 イイスス群ぐんじゆう衆うの己おのれを環めぐれるを見て、門もん徒とに彼かれの岸きしに往ゆかんことを命めいぜり。一九 時に一ひとの學がくし徒かれに就つきて曰いへり、師しよ、爾なんぢ何いかん處ところに往ゆくとも、我われ爾なんぢに從したがはん。二〇 イイスス之これに謂いふ、狐きつねには穴あなあり、天そら空とりの鳥とりには巢すあり、唯ただ人ひとの子こには首かうべを枕まくらする處ところなし。二一 又一また一ひとの門もん徒と彼かれに謂いへり、主しゆよ、我われに先まづ往ゆきて我わが父ちちを葬ほうむるを容ゆるせ。二三 然しかれどもイイスス之これに謂いへり、我われに從したがへ、死し者しやに其その死し者しやを葬ほうむるを任まかせよ。二三 彼かれが舟ふねに登のぼりし時とき、其その門もん徒と彼かれに從したがへり。二四 視みよ、大おほなる颶はやて風うみ海みに作おこりて、舟ふね浪なみに蔽おほはるるに至いたれり、彼かれ適あた寝なたり。二五 門もん徒と就つきて、彼かれを醒さまして曰いへり、主しゆよ、我われ等らを救すくへ、殆ほとんど亡ほろぶ。二六 彼かれは之これに謂いふ、小せう信しんの者ものよ、何なんぞ怯おそるる、即すなはち起おこきて、風かぜと海うみとを禁いめたれば、大おほい穩おだやかなり。二七 人ひと人ひと奇きとして曰いへり、此これ何なん人ひとぞ、風かぜも海うみも彼かれに順したがふ。二八 彼かれの岸きしなるゲルゲシンの地ちに至いたりし時とき、魔ま鬼きに憑よらるる者もの二人にん墓はかより出いでて、彼かれを迎むかふ、甚はなはだ猛たけし、人ひとの敢あへて其その路みちを過すぐるなきに至いたれり。二九 視みよ、彼かれ等ら號なげびて曰いへり、神かみの子こイイススよ、我われ等らと爾なんぢと何なんぞ與あづからん、時とき未いまだ至いたらざる先さきに、爾なんぢ我われ等らを苦くるめん爲ために此こに來きたりしか。三〇 此こより遙はるかに豕ぶたの大おほなる群むれは牧かはれたり。三二 魔ま鬼き彼かれに求もとめて曰いへり、若もし我われ等らを逐おひ出いださば、豕ぶたの群むれに入るいるを容ゆるせ。三三 彼かれは之これに謂いへり、往ゆけ、魔ま鬼き出いでて豕ぶたの群むれに入い

りしに、視みよ、豕ぶたの群むれ悉ことごとく山がけ坡より海うみに逸かけて、水みづに溺おぼれたり。三三 牧かふ者もの奔はしりて邑まちに入り、此こ等らの事ことと魔ま鬼きに憑よらるる者ものの事こととを告つげたるに、三四 視みよ、邑まち舉こぞりて出いでて、イイスス迎むかへ、彼かれを見て、其その境さかひを離はなれんことを請こへり。

第九章 一 彼かれ舟ふねに登のぼり、濟わたりて己おのれの邑まちに來きたれり。二 視みよ、癱ちゆう瘋ふうを患わづら

ひて牀とこに臥ふせる者ものを彼かれに昇かき來きたれる者ものあり、イイスス彼かれ等らの信しんを見みて、癱ちゆう瘋ふうの者ものに謂いへり、子こよ、心こころを安やすんぜよ、爾なんぢの罪つみは爾なんぢに赦ゆるさる。三 時に或ある學がく士し等ら己おのれの衷うちに謂いへり、彼かれは褻けがす言ことばを言いふ。四 イイスス其その意おもひを見みて曰いへり、爾なんぢ等ら何なんぞ心こころの中うちに惡あしきことを懷おもふ、五 蓋けだ爾なんぢの罪つみ赦ゆるさると言いひ、或あるは起おこきて行ゆけと言いふは、孰いづれか易やすき、六 然しかれども爾なんぢ等らが人ひとの子この地ちに在ありて罪つみを赦ゆるす權けんあることを知らん爲ため、(是こに於おいて癱ちゆう瘋ふうの者ものに謂いふ)起おこきて、爾なんぢの牀とこを取りて、爾なんぢの家いへに往ゆけ、七 彼かれ即すなはち起おこきて、牀とこを取りて、其その家いへに往ゆけり。八 民たみ之これを見て奇きと爲なし、是かくの如ごとき權けんを人ひとに賜たまひし神かみを讚さん榮えいせり。九 イイスス彼かれ處ところより往ゆきて、税ぜい關くわんに坐ざする一人いちにん、マトフエイと名なづくる者ものを見て、之これに謂いふ、我われに從したがへ、彼かれ起おこちて從したがへり。一〇 イイスス家いへに席せき坐ざせし時とき、視みよ、多おほくの税ぜい吏り及および罪ざい人にん來きたりて、彼かれ及および其その門もん徒とと偕ともに席せき坐ざせり。一一 ファリセイ等ら之これを見て、其その門もん徒とに謂いへり、爾なんぢ等らの師しは何なんぞ税ぜい吏り及および罪ざい人にんと偕ともに、食しょく飲くいんする。一二 イイスス之これを聞ききて、彼かれ等らに謂いへり、康すこ強やか

なる者は醫師を求めず、乃病を負ふ者は之を需む、一三 爾等往きて、我矜恤を欲して祭祀を欲せずと、云ふ事の意如何を學べ、蓋我が來りしは、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲なり。一四 當時イオアンの門徒彼に就きて曰く、我等とファリセイ等とは多く齋するに、爾の門徒が齋せざるは何ぞや。一五 イイスス彼等に謂へり、婚筵の客は、新娶者の尚之と偕に在る時、豈哀しむを得んや、然れども新娶者の彼等より取らるる日至らん、其時に齋せん。一六 新しき布片を用て舊き衣を補ふ者あらず、蓋補ひし片は衣を壞りて、其綻更に甚しからん。一七 又新しき酒を舊き革囊に盛らず、然らずば囊敗れて酒漏れ、囊も亡びん、乃新しき酒を新しき囊に盛る、然らば兩者存す。一八 イイスス彼等に此を語れる時、或宰來りて彼を拜して曰く、我が女今死せり、求む、爾來りて之に手を按せよ、彼必生きん。一九 イイスス起ちて之に従へり、其門徒も偕にせり。二〇 視よ、十二年血漏を患ふる婦後より就きて、彼の衣の裾に捫れり、二一 蓋己の衷に謂へり、我唯其衣にのみ捫らば、愈ゆるを得んと。二二 イイスス身を轉じて、彼を見て曰へり、女よ、心を安んぜよ、爾の信は爾を救へり、此の時より婦愈ゆるを得たり。二三 イイスス宰の家に來り、籥を吹く者と吶げる民とを見て、二四 彼等に謂へり、退け、蓋女は死せしに非ず、乃寝ぬるなり、人人彼を晒へり。二五 民の出されし後、彼入

りて、其手を執りしに、女起きたり。二六 此の事の聲聞徧く其地に傳はれり。二七 イイススの彼處より往く時、二人の瞽者彼に従ひて、呼びて曰へり、ダワイドの子イイススよ、我等を憐め。二八 彼家に入りしに、瞽者彼に就けり、イイスス之に謂ふ、我之を成すことを能すと信ずるか、彼等曰く、主よ、然り。二九 是に於て其目に觸れて曰へり、爾等の信の如く爾等に成るべし。三〇 其目即啓きたり。イイスス嚴しく彼等を戒めて曰へり、慎みて人に知らしむる勿れ。三一 然れども彼等出でて、其名を遍く其地に揚げたり。三二 彼等の出づる時、視よ、瘡にして魔鬼に憑らるる人をイイススに攜へ來れるあり。三三 魔鬼逐ひ出されて瘡者言へり。民奇として曰へり、イズライリの中に未だ是くの如き事あらざりき。三四 然れどもファリセイ等曰へり、彼は魔鬼の魁に藉りて魔鬼を逐ひ出す。三五 イイスス徧く邑と村とを巡りて、其諸會堂に於て教を傳へ、天國の福音を宣べ、民間の諸の病諸の疾を醫せり。三六 彼群衆を見て、之を憫みたり、其牧者なき羊の如く、憊れ且散りたるが故なり。三七 是に於て其門徒に謂ふ、穢は多く、工は少し。三八 故に穢主は、工を其穢所に遣さんことを求めよ。

第十章 イイスス其十二門徒を召して、彼等に汚鬼を制する權を與へたり、之を逐ひ出し、又諸の病諸の疾を醫さん爲なり。

二十二使徒の名左の如し、第一にはシモン名づけてペトルと云ふ者、及び其兄弟アンドレイ、ゼウェデイの子イアコフ及び其兄弟イオアン、三フィリッポ及びワルフオロメイ、フオマ及び税吏マトフェイ、アルフェイの子イアコフ及びレウェイ、稱してファデイと云ふ者、四シモン「カナニト」及びイウダ「イスカリオト」、即彼を賣りし者なり、五 イイスス此の十二徒を遣し、之に戒めて曰へり、異邦の途に往く勿れ、サマリヤの邑に入る勿れ、六 寧イズライリの家の亡びし羊に往け。七 往く時宣べて曰へ、天國は邇つけりと。八 病者を醫し、癩者を潔め、死者を起し、魔鬼を逐ひ出せ、費なくして受けたり、費なくして與へよ。九 金をも銀をも銅をも爾等の帶に貯ふる勿れ、一〇 行囊をも二の衣をも履をも杖をも執る勿れ、蓋勞する者の其糧を得るは宜しきなり。一一 何の邑或は村に入るとも、其中に孰か可なる者たるを尋ね、彼處に留りて出づるに至れ。一二 家に入る時は、其安を問ひて、此の家に平安と云へ。一三 若し其家に當らば、爾等の平安は之に臨まん、若し當らずば、爾等の平安は爾等に歸らん。一四 若し爾等を接げず、爾等の言を聴かざる者あらば、其家或は其邑を出づる時、爾等の足の塵を拂へ。一五 我誠に爾等に語り、審判の日に於て、ソドム及びゴモラの地は、斯の邑より忍び易からん。一六 視よ、我が爾等を遣すは、羊を狼の中に入るが如し、故に智きこと蛇の如く、玷なきこと鴿の如くなれ。一七 謹みて

人人に意を用るよ、蓋彼等は爾等を其公會に解し、其會堂に鞭うたん。一八 且爾等は我が爲の故に諸侯諸王の前に曳かれん、彼等と異邦民とに證を爲さん爲なり。一九 爾等を解さん時、如何に或は何を言ふべきを慮る勿れ、其時言ふべきこと爾等に與へられんとすればなり。二〇 蓋爾等言はんとするに非ず、乃爾等の父の神は爾等の衷に言はん。二一 兄弟は兄弟を父は子を死に付し、子は親を攻め、且之を殺さん。二二 爾等我が名の爲に衆人に憎まれん、唯終に至るまで忍ぶ者は救はれん。二三 爾等を此の邑に窘逐する時は、他の邑に奔れ、蓋我誠に爾等に語り、爾等が未だイズライリの諸邑を巡り盡さざるに、人の子來らん。二四 門徒は其師の上に在らず、僕は其主の上に在らず。二五 門徒は其師の如く、僕は其主の如くなりて足れり、若し家主を呼びてワエルゼウルと云ひしならば、況んや其家人をや。二六 故に彼等を懼る勿れ、蓋覆はれて露れざる者なく、隠れて知られざる者なし。二七 我が暗の中に爾等に言ふ事を爾等光の中に述べよ、耳を付けて聴く事を屋の上に傳へよ。二八 身を殺して靈を殺す能はざる者を懼る勿れ、寧靈と身とを地獄に滅すことを能する者を懼れよ。二九 二の雀は一錢にて售らるるに非ずや、若し爾等の父の旨なくば、其一も地に隕ちざらん。三〇 爾等に於ては首の髪も皆數へられたり。三一 故に懼る勿れ、爾等は多くの雀より貴し。三二 然らば凡そ我を人の前に認めん者

は、我も亦彼を天に在す我が父の前に認めん。三三 我を人の前に諱ま
ん者は、我も亦彼を天に在す我が父の前に諱まん。三四 我和平を地に
投ぜん爲に來れりと意ふ勿れ、我が來れるは和平に非ず。乃 刃を投
ぜん爲なり、三五 蓋我が來れるは、人を其父と、女を其母と、婦を
其姑と分たん爲なり、三六 人の家人は其敵とならん。三七 父或は母
を愛すること我に過ぐる者は、我に宜しからず、子或は女を愛する
こと我に過ぐる者は、我に宜しからず。三八 己の十字架を負ひて我
に従はざる者は、我に宜しからず。三九 其生命を得る者は、之を喪
はん、我が爲に其生命を喪ふ者は、之を得ん。四〇 爾等を接くる者
は、我を接くるなり、我を接くる者は、我を遣しし者を接くるなり。
四一 預言者の名に因りて、預言者を接くる者は、預言者の賞を受け
ん、義人の名に因りて義人を接くる者は、義人の賞を受けん。四二
門徒の名に因りて此の小子の一に唯冷水一杯を飲ましめん者は、
我誠に爾等に語ぐ、其賞を失はざらん。

第十一章 イイスマ十二門徒に命じ畢りて、彼處より移り、其諸邑
に教を傳へ、道を宣べたり。ニイオアン 獄に在りてハリストスの行
ふ所を聞き、其門徒の二人を遣して、三 彼に謂へり、來るべき者
は爾なるか、抑我等佗の者を俟つべきか。四 イイスマ彼等に答へ
て曰へり、往きて、聞く所見る所をイオアンに告げよ、五 卽 瞽者

は明き、跛者は歩み、癩者は潔まり、聾者は聽き、死者は起き、貧者
は福音す。六 凡そ我の爲に惑はざる者は 福なり。七 彼等が去りし後
イイスマイオアンの事を擧げて民に謂へり、爾等何を觀んとして野
に出でしか、風に動かさるる葦か、八 抑何を觀んとして出でしか、
柔き衣を衣たる人か、視よ、柔き衣を衣る者は王の宮に在り。
九 然らば何を觀んとして出でしか、預言者か、然り、我爾等に語ぐ、彼
は預言者よりも大なり。一〇 蓋彼は夫の録して、視よ、我我が使
を爾の面前に遣し、爾に先だちて爾の道を備へしめんと、曰はれ
たる者なり。一一 我誠に爾等に語ぐ、婦の生みし者の中、授洗イ
オアンより大なる者は起らざりき、然れども天國に於て至と小き者
は彼より大なり。一二 授洗イオアンの日より今に至るまで、天國は
力を以て得らる、而して力を用ゐる者は之を奪ふ、一三 蓋 悉く
の預言者と律法とは預言してイオアンまでに終れり。一四 且若し爾
等承けんことを欲せば、彼は來るべきイリヤなり。一五 耳ありて聽く
を得る者は聽くべし。一六 抑斯の世を誰に譬へんか、是れ童子、街
に坐して、其侶に呼びて、一七 我等は爾等に籥を吹きたれども、
爾等踊らざりき、爾等に 悲の歌を謡ひたれども、爾等哭かざり
きと、云ふ者に似たり。一八 蓋イオアン來りて、食はず、飲まず、人
は言ふ、彼魔鬼に憑らると、一九 人の子來りて、食ひ飲む、又言ふ、視
よ、是れ食を嗜み酒を好む者、税吏及び罪人の友なりと、唯睿智の子

は睿智の義を明にせり。二〇其時イイスス殊に多く異能を行はれし諸邑の悔改せざるに因りて、是れを責めて曰へり、二二 禍なる哉爾ホラジンよ、禍なる哉爾ワイフサイダよ、蓋爾等の中に行はれし異能は、若しティル及びシドンに行はれしならば、彼等は早く麻を衣、灰を蒙りて、悔改せしならん、二三 故に我爾等に語ぐ、審判の日に於て、ティル及びシドンは爾等より忍び易からん。二三 天にまで擧げられしかカペルナウムよ、爾も地獄にまで落されん、蓋爾の中に行はれし異能は、若しソドムに行はれしならば、彼尚存して今日に至りしならん、二四 故に我爾等に語ぐ、審判の日に於て、ソドムの地は爾より忍び易からん。二五 其時イイスス語を續ぎて曰へり、父、天地の主よ、我爾を讚榮す、爾此等を智者及び達者に隠して、之を赤子に顯ししに因る、二六 父よ、然り、蓋是くの如きは爾の旨の嘉せし所なり。二七 萬物は我が父より我に授けられたり、父の外に子を識る者なく、子及び子が顯さんと欲する者の外に父を識る者なし。二八 凡そ勞苦する者及び重を任ふ者は我に來れ、我爾等を安んぜしめん。二九 我が軛を負ひて我に學べ、我は心溫柔にして謙遜なればなり、爾等は其靈に安息を獲ん。三〇 蓋我が軛は易く、我が任は輕し。

第十二章 一 當時イイスス安息日に禾田を過ぎ行けるに、彼の門徒飢

ゑて、穂を摘みて食へり。二 ファリセイ等之を見て、彼に謂へり、視よ、爾の門徒は安息日に行ふべからざることを行ふ。三 彼曰へり、爾等は、ダワイドが己及び其従者の飢ゑし時行ひし事、四 卽如何にして彼は神の家に入りて、己も従者も食ふべからず、唯司祭等のみ食ふべき供前の餅を食ひしを讀まざりしか、五 抑爾等は、司祭等が安息日に於て、殿の内に安息日を犯すとも罪なきことを律法に讀まざりしか。六 然れども我爾等に語ぐ、此には殿より大なる者なり。七 若し爾等は、我矜恤を欲して祭祀を欲せずと、云ふことの意味如何を知りしならば、辜なき者を罪せざりしならん。八 蓋人の子は亦安息日の主なり。九 乃 彼處を離れて、彼等の會堂に入れり。一〇 視よ、茲に一手の枯へたる人あり、彼等イイススを罪せん爲に、之に問ひて曰へり、安息日に醫を施すは宜しきか。一一 彼曰へり、爾等の中孰か一の羊有りて、若し此れ安息日に抗に陥らば、之を援けて上げざらんか、一二 人は羊より貴きこと幾何ぞ、故に安息日に善を行ふは宜しきなり。一三 是に於て其人に謂ふ、爾の手を伸べよ、彼伸ぶれば、卽 健になりしこと他の手の如し。一四 ファリセイ等出でて、如何にしてイイススを滅さんと相謀れり。一五 イイスス之を知りて、彼處を離れたり、衆くの民彼に従へり、彼悉く之を醫し、一六 且之に己を顯す勿らんことを戒めたり。一七 預言者イサイヤを以て言はれし事に應ふを致す、云く、一八 視よ、我が選びし我

の僕我が靈の悦ぶ所の我の至愛の者、我は我が神を彼に賦せん、
彼は諸民に審判を示さん、一九彼は争はず、號ばず、人其聲を衢に聞
かざらん。二〇傷める葦を折らず、烟れる麻を熄さずして、審判に勝
を得しむるに至らん、二一 諸民彼の名を頼まんと。二二 時に魔鬼に憑
らるる瞽にして瘖なる者を彼に攜へ來れるあり、彼之を醫し、瞽
にして瘖なる者は言ひ且見るを得たり。二三 衆民駭きて曰へり、此
れダワイドの子ハリストスなるに非ずや。二四 然れどもファリセイ
等之を聞きて曰へり、彼が魔鬼を逐ひ出すは、魔鬼の魁ワエエルゼ
ウルに藉るに外ならず。二五 イイスス其意を知りて、彼等に謂へり、
凡の國自ら分れ争はば、荒墟となり、凡の邑或は家自ら分れ争
はば、立たざらん、二六 若しサタナにしてサタナを逐ひ出さば、彼自
ら分れ争ふなり、然らば其國如何にして立たん。二七 若し我ワエ
ルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出さば、爾等の諸子は誰に藉りて之を
逐ひ出すか、故に彼等は爾等の審判者と爲らん。二八 然れども若し
我神の神に藉りて魔鬼を逐ひ出さば、則神の國果して爾等に臨み
しなり。二九 或は人如何にして強き者の家に入りて、其器を劫
すを得るか、豈先づ強き者を縛りて、然る後其家を劫すに非ずや。
三〇 我偕にせざる者は我に敵し、我と偕に聚めざる者は散らすなり。
三一 故に我爾等に語ぐ、凡の罪と褻瀆とは人人に赦されん、然れど
も神に對する褻瀆は人人に赦されざらん。三二 人の子に敵して言を

出さば、其人赦されん、然れども聖神に敵して言を出さば、其人今世
にも來世にも赦されざらん。三三 或は樹を善しとし、其果をも善し
とせよ、或は樹を惡しとし、其果をも惡しとせよ、蓋樹は其果によ
りて識らる。三四 蝮の類よ、爾等惡しき者にして、何ぞ善きこと言
ふを得ん、蓋心に充つる者は口に言ふなり。三五 善き人は善き寶庫
より善き者を出し、惡しき人は惡しき寶庫より惡しき者を出す。三六
我爾等に語ぐ、凡そ人の言ふ所の虚しき言は、審判の日に於て之
が答を爲さん、三七 蓋爾は己の言に由りて義とせられ、亦己の
言に由りて罪に定められん。三八 其時或學士及びファリセイ等曰へ
り、師よ、我爾よりする休徴を觀んと欲す。三九 彼答へて曰へり、
姦惡の世は休徴を求む、而して預言者イオナの休徴の外、之に休
徴は與へられざらん、四〇 蓋イオナが三日三夜鯨の腹に在りし
如く、人の子も三日三夜地の心に在らん。四一 ニネワイヤの人は
審判の時に斯の世と共に起ちて、之を罪せん、蓋彼等はイオナの傳教
に由りて悔改せり、視よ、此にはイオナより大なる者あり。四二 南方
の女王は審判の時に斯の世と共に起ちて、之を罪せん、蓋彼は地の
極よりソロモンの智慧を聽かん爲に來れり、視よ、此にはソロモン
より大なる者あり。四三 汚鬼人より出でて後、水なき地を巡り、安息
を求むれども得ず、四四 其時曰く、我嘗て出でし我が家に歸らんと、既
に來りて、其家の虚しくして、掃き且飾りたるを見、四五 乃往きて、

己より悪しき他の七鬼を攜へ來り、偕に入りて彼處に居るなり、是に於て其人の爲に、後の患は先より更に甚し、斯の悪しき世にも亦是くの如くならん。四六 イイススが尚民に語れる時、彼母及び兄弟外に立ちて、彼と言はんと欲せり、四七 或彼に謂へり、視よ、爾の母及び爾の兄弟外に立ちて、爾と言はんと欲す。四八 彼は言ひし者に答へて曰へり、孰か我が母たり、孰か我が兄弟たる、四九 乃手を伸べて、其門徒を指して曰へり、是れ我が母なり、我が兄弟なり、五〇 蓋凡そ天に在す我が父の旨を行はん者は、彼即我が兄弟なり、姉妹なり、母なり。

第十三章 一 當日イイスス家を出でて、海濱に坐せり。二 衆くの民彼の許に集りたれば、彼舟に登りて坐するに至れり、民皆岸に立てり。三 乃多く譬を以て彼等に語りて曰へり、視よ、種を播く者出でて、種を播きたり。四 播く時、道の旁に遺ちし者あり、鳥來りて、之を啄めり。五 土の薄き磽地に遺ちし者あり、土の深かざるに因りて、直に萌え出でしが、六 日の出でて後萎み、根なきに因りて槁れたり。七 棘の中に遺ちし者あり、棘起きて、之を蔽へり。八 沃壤に遺ちし者あり、實を結びしこと或は百倍或は六十倍、或は三十倍なり。九 耳ありて聽くを得る者は聽くべし。一〇 門徒彼に就きて曰へり、爾何の故に譬を以て彼等に語るか。一一 彼答へて曰へり、爾等に

は天國の奧義を知ること與へられたれども、彼等には與へられざりし故なり。一二 蓋有てる者は、之に與へて餘あらしめ、有たざる者は、其有てる物もこれより奪はれん。一三 我が譬を以て彼等に語るは、彼等が視て見ず、聽きて聞かず、又悟らざる故なり。一四 斯く彼等に於てイサイヤの預言應へり、云く、爾等耳にて聽けども悟らず、目にて視れども見ざらん、一五 蓋此の民の心は頑になれり、耳は聽くに憚く、目は自ら閉ぢたり、恐らくは目にて見、耳にて聞き、心にて悟り、轉じて我が彼等を醫さんと。一六 然れども爾等の目は見、爾等の耳は聞くが故に福なり、一七 蓋我誠に爾等に語り、多くの預言者と義人とは、爾等が見る所を見んと欲して見ざりき、爾等が聞く所を聞かんと欲して聞かざりき。一八 故に爾等種を播く者の譬の義を聽け、一九 凡そ天國の言を聞きて悟らざる者には、凶惡者來りて其心に播かれたる者を奪ふ、此れ道の旁に播かれたる者なり。二〇 磽地に播かれたる者は、此れ言を聽きて、直に喜びて受くれども、二一 己に根なきが故に暫時のみ、言の爲に艱難或は窘逐に遇はば直に躓く。二三 棘の中に播かれたる者は、此れ言を聽けども、斯の世の慮と貨財の惑と其言を蔽ひて、實を結ばず。二三 沃壤に播かれたる者は、此れ言を聽きて悟り、實を結ぶこと或は百倍、或は六十倍、或は三十倍に至る者なり。二四 又譬を設けて彼等に謂へり、天國は人の其田に美種を播きたるが如し。二五 人人の寢ぬ

る時、其敵來り、麥の中に稗を播きて去れり。二六 苗秀でて實るに及び、稗も亦見れたり。二七 家主の諸僕來りて之に謂へり、主よ、爾は美種を爾の田に播きたるに非ずや、然らば何に由りて稗あるか、二八 彼は之に謂へり、敵人之を爲せり。諸僕彼に謂へり、然らば爾は我等が往きて、之を抜かんことを欲するか、二九 彼曰へり、否、恐らくは爾等稗を抜く時、之と共に麥をも抜かん。三〇 二の者共に長ずるを容して、收穫に至れ、收穫の時我刈る者に謂はん、先づ稗を集め、之を束ねて、焚かん爲に備へ、而して麥を我が倉に斂めよと。三一 又譬を設けて彼等に謂へり、天國は芥種、人取りて其田に播きたる者の如し、三二 是れ萬の種の中最も小き者なれども、長ずるに及びては、悉くの野菜より、大にして、樹と爲り、天空の鳥來りて、其枝に棲むに至る。三三 又譬を彼等に語りて曰へり、天國は酵の如し、婦之を取りて、三斗の麴の中に納れしに、悉く発酵するに至れり。三四 此れ皆イイスス譬を以て民に語れり、譬に非ずしては彼等に語らざりき、三五 預言者を以て言はれし事に應ふを致す、云く、我が口を啓きて譬を言ひ、創世以來隠れたることを述べんと。三六 其時イイスス民を散じて、家に入れり。其門徒彼に就きて曰く、請ふ、田の稗の譬を我等に解け。三七 彼は之に答へて曰へり、美種を播く者は人の子なり、三八 田は世界なり、美種は天國の子、稗は凶悪者の子なり。三九 之を播きたる敵は悪魔なり、收穫は世の終末

なり、刈る者は天使等なり。四〇 故に稗を集めて、火に焚くが如く、此の世の終末にも是くの如くならん。四一 人の子は其天使等を遣して、其國より凡の誘惑と不法を行ふ者とを集めて、四二 之を火の爐に投ぜん、彼處に哀哭と切齒とあらん。四三 時に義人等は其父の國に於て日の如く輝かん。耳ありて聽くを得る者は聽くべし。四四 又天國は田に藏れたる寶の如し、人之を見出したれば秘し、喜びて往き、盡く其諸有を鬻ぎて、斯の田を買ふ。四五 又天國は美き真珠を求むる商賣の如し、四六 彼の値貴き真珠を見出したれば、往きて盡く其所有を鬻ぎて、之を買へり。四七 又天國は海に施して種種の魚を集むる網の如し、四八 既に盈ちたれば、之を岸に曳き上げ、坐して、嘉き者を選びて器に入れ、悪しき者を外に棄てたり。四九 世の終末にも是くの如くならん、天使等出でて、悪者を義者の中より分ちて、五〇 之を火の爐に投ぜん、彼處には哀哭と切齒とあらん。五一 イイスス彼等に謂ふ、此れ皆爾等悟りしか、彼等曰く、主よ、然り。五二 彼は之に謂へり、故に凡そ天國を學びたる學士は、其寶庫より新しき物と舊き物とを出す家主の如し。五三 イイスス此等の譬を竟りて、彼處を去れり。五四 己の故土に來りて、會堂に於て彼等を教へたるに、彼等奇とするに至れり、曰く、斯の人何より斯る智慧と異能とを得たる。五五 彼は木工の子なるに非ずや、其母はマリヤと名づけらるるに非ずや、其兄弟はイアコフ、イオシイ、シモン、イウダなる

に非ずや。五六 其姉妹は皆我等の間に在るに非ずや、然らば此等皆斯の人何より得たるか、五七 遂に彼の爲に惑へり。イイスス彼等に謂へり、預言者は其故土及び其家の外に於ては尊ばれざるなし。五八 乃彼等の信ぜざるに由りて、彼處に多くの異能を行はざりき。

第十四章 一 當時分封の君イロド、イイススの聲名を聞き、二 其侍臣に謂へり、此れ授洗イオアンなり、彼死より復活せり、故に彼に由りて異能は行はる。三 蓋イロドは其兄弟フィリップの妻イロデアダの故に因りて、イオアンを執へ、之を縛りて、獄に入れたり。四 蓋イオアン彼に謂へり、爾此の婦を納るるは宜しからずと。五 且之を殺さんと欲したれども、民を懼れたり、其之を預言者と爲しし故なり。六 適イロドの誕生日に値り、イロデアダの女席上に舞ひて、イロドの喜を獲たり。七 故に彼誓ひて、其求むる所に隨ひて、之を與へんことを約せり。八 女母の囑に因りて曰へり、授洗イオアンの首を盤に盛りて、此に我に與へよ。九 王憂ひたれども、誓の爲、又共に席坐する者の爲の故に、之を與へんことを命ぜり。一〇 乃人を遣してイオアンを獄に斬り、二 其首を盤に盛り、攜へ來りて女に與へたれば、女之を其母に攜へたり。一二 彼の門徒來りて其屍を取りて、之を葬り、且往きてイイススに告げたり。一三 一三 イイスス聞きて舟に乗り、彼處を離れて、獨野の處に往けり、民之

を聞き、諸邑より歩みて彼に従へり。一四 イイスス出でて、群衆を見て、之を憫み、其病める者を醫せり。一五 日暮るるに及びて、門徒彼に就きて曰へり、此は野の處にして、時已に晩し、民を去らしめよ、彼等が諸村に往きて、己の爲に食を市はん爲なり。一六 然れどもイイスス彼等に謂へり、其往くを要せず、爾等之に食を與へよ。一七 彼等曰く、我等には此には唯五の餅と二一の魚とあるのみ。一八 彼曰へり、之を此に我に攜へ來れ。一九 乃民に命じて、草の上に坐せしめ、五の餅と二一の魚とを取りて、天を仰ぎて祝福し、餅を擘きて、之を門徒に與へ、門徒民に與へたり。二〇 皆食ひて飽き、其餘りたる屑を拾ひて、十二の筐に盈てたり。二一 食ひし者は、婦と幼童との外、約五千人なりき。二二 イイスス直に其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去らしむる間に、己に先だちて、彼の岸に往かしめたり。二三 民を去らしめて後、彼は獨處に於て祈禱せん爲に山に登り、既に暮れて、獨彼處に在りき。二四 時に舟海の中に在りて、浪に撼られたり、風の逆ひし故なり。二五 夜四更の時、イイスス海を履みて彼等に往けり。二六 門徒其海を履むを見て、驚きて曰へり、是れ怪物なり、乃懼に由りて呼べり。二七 然れどもイイスス直に彼等に語りて曰へり、心を安んぜよ、是れ我なり懼るる勿れ。二八 ペトル彼に答へて曰へり、主よ、若し是れ爾ならば、我に水を履みて爾に至らんことを命ぜよ。二九 彼曰へり、來れ、ペト

ル舟を下り、水を履みて、イイススの許に往けり。三〇然れども風の烈しきを見て、懼れ、溺れんとして、呼びて曰へり、主よ、我を救へ。三二 イイスス直に手を伸べて、之を援けて曰く、小信の者よ、何ぞ疑ひたる。三三 共に舟に登るに迫りて、風息みたり。三四 舟に在る者就きて、彼を拜して曰へり、爾は誠に神の子なり。三五 既に濟りて、ゲンニサレトの地に來れり。三六 其處の人人彼を識りたれば、遍く其近傍に人を遣して、病ある者を悉く攜へ來らしめ、三六 唯彼の衣の裾に捫らんことを求めたり、之に捫りし者は愈ゆるを得たり。

第十五章

一 其時イエルサリムより來れる學士及びファリセイ等イイススに就きて曰く、二 爾の門徒何ぞ古人の傳を犯す、蓋餅を食ふ時其手を盥はざるなり。三 彼答へて曰へり、爾等も何ぞ爾等の傳の爲に神の誠を犯す、四 蓋神誠めて曰へり、父母を敬へ、又曰へり、父或は母を罵る者は死すべしと、五 然れども爾等曰く、人若し父或は母に對ひて、爾が我より得べき者は、禮物と爲れりと云はば、六 其父或は母を敬はずとも可なりと、斯く爾等は其傳を以て神の誠を廢せり。七 偽善者よ、イサイヤは爾等の事を善く預言して云へり、ハ斯の民は口にて我に近づき、唇にて我を敬へども、其心は遠く我に離る、九 彼等は人の誠を教と爲して、教へて、徒に我を尊むと。一〇 是に於て衆を召して彼等に謂へり、聽きて悟れ。

二 口に入る者は人を汚さず、乃口より出づる者は、斯れ人を汚すなり。二三 時に門徒彼に就きて曰へり、ファリセイ等が斯の言を聞きて惑ひしを爾知れるか、二三 彼答へて曰へり、凡そ我が天の父の植ゑざりし植物は、其根絶やされん。二四 姑く彼等を舍け、彼等は瞽にして、瞽を導く者なり、若し瞽にして、瞽を導かば、二人ながら抗に陥らん。二五 ペトル對へて彼に謂へり、請ふ、斯の瞽を我等に解け。一六 イイスス曰へり、爾等も未だ悟らざるか。一七 豈凡そ口に入る者は、腹を運りて外に遺てらるるを知らざるか。一八 然れども口より出づる者は心より出づ、斯れ人を汚すなり。一九 蓋心より出づる者は、惡念、凶殺、姦淫、邪淫、盜竊、妄證、褻瀆なり。二〇 此等は人を汚す、然れども盥はざる手を以て食ふは、人を汚さざるなり。二一 イイスス彼處を離れてテイル及びシドンの地に往けり。二三 視よ、ハナアンの婦其疆より出でて、彼に呼びて曰へり、主ダワイドの子よ、我を憐め、我が女魔鬼に憑らるること甚し。二三 然れども彼一言も之に答へざりき。其門徒就きて、彼に請ひて曰へり、之を去らしめよ、蓋我等の後より呼ぶ。二四 彼答へて曰へり、我は唯イスライリの家の亡びし羊にのみ遣されたり。二五 婦近づきて、彼を拜して曰へり、主よ、我を助けよ。二六 彼答へて曰へり、兒曹の餅を取りて、狗に投ぐるは、宜しからず。二七 婦曰へり、主よ、然り、唯狗も又其主の食卓より遺つる屑を食ふ。二八 其時イイスス答へて彼に

謂へり、嗚呼婦よ、爾の信は大なり、爾が望む如く爾に成るべし、其女斯の時より愈えたり。二九 イイスマス彼處を去りて、ガリレヤの海濱に來り、山に登りて坐せり。三〇 衆の民は跛者、瞽者、殘缺者及び他の多くの者を伴ひ來りて、イイスマスの足下に置きたれば、彼之を醫せり。三一 民は瘡者の言ひ、殘缺者の健になり、跛者の歩み、瞽者の見るを見て、之を奇として、イズライリの神を讚榮せり。三二 イイスマス其門徒を召して、彼等に謂へり、我斯の民を憫む、蓋已に三日我と偕に在りて、食ふ物なし、我彼等を飢ゑて去らしむるを欲せず、恐らくは途中に餓れん。三三 門徒彼に謂ふ、我等野に在りて、斯く多くの民を飽かしむるに足る餅を何處より得んや、三四 イイスマス彼等に謂ふ、爾等に餅幾何かある、彼等曰へり、七及び些須の小さき魚。三五 是に於て民に命じて地に坐せしめ、三六 七の餅と魚とを取りて、感謝し、之を擘きて、門徒に與へ、門徒民に與へたり。三七 皆食ひて飽き、其餘りたる屑を拾ひて、七の筐に盈てたり。三八 食ひし者は、婦と幼童との外、四千人なりき。三九 既に民を去らしめて、彼舟に登りマグダラの疆に至れり。

第十六章 一 ファリセイ及びサドドウケイ等就きて、彼を試みて、天よりする休徴を彼等に示さんことを請へり。二 彼答へて曰へり、暮には爾等言ふ、晴天とならん、天紅なればなり。三 朝には言ふ、

今日風雨とならん、天紅にして、晦ければなりと、偽善者よ、爾等天の面を別つを知りて、時の休徴を究むる能はざるか。四 姦惡の世は休徴を求む、而して預言者イオナの休徴の外、之に休徴は與へられざらん、遂に彼等を離れて去れり。五 門徒彼の岸に濟りて、餅を取ること忘れたり。六 イイスマス彼等に謂へり、謹みて、ファリセイ及びサドドウケイ等の酵を防げ。七 彼等竊に議して曰へり、是れ我等が餅を取らざりしを指すなり。八 イイスマス之を知りて、彼等に謂へり、小信の者よ、何ぞ餅を取らざりしことを竊に議する、九 爾等未だ悟らざるか、又五の餅を五千人に分ちて、幾筐を拾ひしか、一〇 七の餅を四千人に分ちて幾筐を拾ひしかを記憶せざるか、一一 我が爾等にファリセイ及びサドドウケイ等の酵を防げと言ひしは、爾等何ぞ餅の事に非ずと悟らざる。一二 是に於て彼等、其言ひしは、餅の酵に非ず、乃ファリセイ及びサドドウケイ等の教を防ぐべきなるを悟れり。一三 イイスマスはファイリップのケサリヤの地に來りて、其門徒に問ひて曰へり、人人我人の子を言ひて、誰とか爲す、一四 彼等曰へり、或人は授洗イオアンと爲し、他の者はイリヤと爲し、また他の者はイエレミヤ、若しくは預言者の一人と爲す。一五 イイスマス彼等に謂ふ、爾等は我を言ひて誰とか爲す、一六 シモン ペトル對へて曰へり、爾はハリストス、活ける神の子なり。一七 イイスマス答へて彼等に謂へり、イオナの子シモンよ、爾は福なり、蓋血肉は之を爾

に示ししに非ず、乃天に在す我の父なり。一八我も亦爾に語り、爾はペトルなり、我此の磐の上に我の教會を建てん、而して地獄の門は、之に勝たざらん。一九且我爾に天國の鑰を與へん、爾が地に縛る者は、天にも縛られ、爾が地に釋く者は、天にも釋かれん。二〇其時イイスス其門徒に戒めて、己がハリストスたるを人に告ぐる事勿しめたり。二一是れよりイイスス始めて其門徒に、己がイエエルサリムに往き、長老、司祭長、學士等より多く苦を受け、且殺されて、第三日に復活すべきことを示せり。二二ペトル彼を援きて、諫めて曰へり、主よ、自ら憐め、此の事爾に及ぶべからず。二三彼は顧みてペトルに謂へり、サタナ我より退け、爾は我の爲に礙なり、蓋爾は神の事を念はず、乃人の事を念ふ。二四時にイイスス其門徒に謂へり、人若し我に従はんとなせば、己を捨て、其十字架を負ひて、我に従へ。二五蓋己の生命を救はんとなせば、之を喪はん、我の爲に己の生命を喪はん者は、之を得ん。二六人若し全世界を獲とも、己の靈を損なはば、何の益かあらん、抑人何を與へて、其靈の償と爲さんや。二七蓋人の子は其父の光榮を以て、其天使等と偕に來らん、其時各人は其行に依りて報いん。二八我誠に爾等に語り、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、人の子が其國に來るを見んとする者あり。

第十七章 一六日を越えて、イイススはペトル、イアコフ及び其兄弟イオアンを攜へ獨彼等を率ゐて、高き山に登り、二彼等の前にて容を變へたり、其面は日の如く輝き、其衣は光の如く皎くなれり。三視よ、モイセイ及びイリヤ現れて、彼と與に語り。四時にペトルイイススに謂へり、主よ我等此に居るは善し、爾若し欲せば、我等此に三の廬を建てて、一は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん。五彼が尚言ふ時、視よ、光れる雲は彼等を蓋ひ、且雲より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子、我が喜べる者なり、彼に聽け。六門徒聞きて俯伏し、懼ること甚し。七イイスス就きて、獨彼等に觸れて曰へり、起きよ、懼る勿れ。八彼等其目を擧げて、獨イイススの外に誰をも見ざりき。九山を下る時イイスス彼等に戒めて曰へり、人の子が未だ死より復活せざる先には、見たる事を人に告ぐる勿れ。一〇門徒彼に問ひて曰へり、然らば學士等がイリヤ先に來るべしと云ふは何ぞや。一一イイスス答へて曰へり、然り、イリヤ先に來りて、萬事を整ふべし。一二唯我爾等に語り、イリヤ既に來りて、而して人彼を識らざりき、乃欲する所に隨ひて、彼を待へり、是くの如く人の子も、彼等より苦を受けん。一三是に於て門徒は、其授洗イオアンの事を彼等に言ひしを悟れり。一四既に民の處に至りしに、或人彼に就きて、跪きて曰へり、一五主よ、我が子を憐め、彼癩癩を患ひて、苦むこと甚し、蓋屢火に倒れ、亦屢水

に倒る、一六 我之を攜へて、爾の門徒に就きたれども、彼等醫すこ
と能はざりき。一七 イイス答へて曰へり、噫信なき悖れる世や、
我何時までか爾等と偕に在らん、何時までか爾等を忍ばん、彼を此
に我に攜へ來れ。一八 イイス魔鬼を禁めたれば、魔鬼出でて、
其子斯の時より愈えたり。一九 其時門徒私にイイスに就きて曰へ
り、我等が之を逐ひ出す能はざりしは何の故ぞ。二〇 イイス彼等に
謂へり、爾等信なき故なり、蓋我誠に爾等に語り、爾等若し芥種
の如き信あらば、此の山に、此より彼に移れと言ふとも、移らん、
又爾等に「も能はざること勿らん。二一 此の類に至りては、祈禱
と齋とに由らざれば出でざるなり。二二 ガリレヤに在る時、イイス
ス彼等に謂へり、人の子は人人の手に付されん。二三 且彼を殺さん、
而して第三日に彼復活せん、彼等甚哀めり。二四 カペルナウム
に來りし時、殿税を集むる者ペトルに就きて曰へり、爾等の師は殿税
を納むるか。二五 彼曰く、然り。家に入りし時、イイス先んじて彼
に謂へり、シモン爾如何に意ふか、地の諸王は貢若くは税を誰より
取るか、己の子よりか、抑も外の者よりか。二六 ペトル曰く、外
の者よりす。イイス彼に謂へり、然らば子は與らず。二七 然れど
も我等が彼等を惑さざらん爲に、爾海に往きて、釣を垂れよ、初
に上る魚を取りて、其口を啓かば、「ステイル」を得ん、之を取り
て、我と爾との爲に彼等に與へよ。

第十八章 一 當時門徒イイスに就きて曰へり、天國に於ては孰か
大なる。ニ イイス幼児を召して、彼等の中に立てて三日へり、我誠
に爾等に語り、爾等若し轉じて、幼児の如くならずば、天國に入る
を得ず。四 故に此の幼児の如く自ら謙らん者は、是れ天國に於て
大なる者なり。五 又我が名に因りて、是くの如き幼児の一人を接
ん者は、我を接くるなり。六 然れども我を信する此の小子の一人を罪
に誘はん者は、寧磨石を其頸に懸けられて、海の深處に沈められん。
七 世は誘惑に由りて禍なる哉、蓋誘惑は來らざるに可からず、但
誘惑を來す人は禍なる哉。八 若し爾の手、或は爾の足爾を罪に
誘はば、斷ちて之を棄てよ、爾の爲には、跛或は殘缺にして生命
に入るは、兩の手兩の足ありて永遠の火に投ぜらるるより勝れり。
九 又若し爾の目爾を罪に誘はば、抉りて之を棄てよ、爾の爲には、
一の目ありて生命に入るは、兩の目ありて火の地獄に投ぜらるるよ
り勝れり。一〇 慎みて、此の小子の一人をも輕んずる勿れ、蓋我爾
に語り、彼等の天使等は天に於て常に我が天の父の顔を觀る。一一
蓋人の子は亡びし者を尋ねて救はん爲に來れり。一二 爾等如何に意
ふか、人若し百匹の羊あらんに、其一迷はば、九十九を山に遺
し、往きて、迷へる者を訪ねざるか。一三 若し之を獲ば、我誠に爾等
に語り、彼が其羊の爲に喜ぶこと、迷はざりし九十九の者より勝

れり。一四斯く此の小子の一人の亡ぶるは、爾等が天の父の旨に非ず。一五若し爾の兄弟爾に罪を得ば、往きて、爾と彼と獨處る時に之を諫めよ、若し爾に聽かば、爾の兄弟を獲たるなり。一六若し聽かずば、一人或は二人を伴ひ、往きて、二三證者の口を以て、凡の言を定むるを致せ。一七若し彼等に聽かずば、教會に告げよ、若し教會にも聽かずば、爾の爲には異邦人と税吏との如くなるべし。一八我誠に爾等に語ぐ、凡そ爾等が地に縛る者は、天にも縛られ、爾等が地に釋く者は、天にも釋かれん。一九又誠に爾等に語ぐ、若し爾等の中二人地に於て心を合せて、凡の事を求めば、何を求むるに論なく、天に在す我が父より彼等に賜はらん。二〇蓋し二人或は三人の我が名に因りて集る處には、我も其中に在るなり。二一其時ペトル彼に就きて曰へり、主よ、我が兄弟我に罪を得ば、幾次之に免すべきか、七次迄か。二二イエス彼に謂ふ、我爾に七次迄と言はず、乃七十次の七倍迄。二三是の故に天國は、其諸僕と會計せしを欲せし君王に似たり。二四會計を始めし時、一千萬金の債ある者は彼に曳き來れるあり。二五其償ふこと能はざるに因りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有とを鬻ぎて、償はんことを命ぜり。二六其僕俯伏して、彼を拜して曰へり、主よ、我を寬うせよ、我盡く爾に償はん。二七其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。二八其僕出でて、一人の同僚の、己に銀一百

の債ある者に遇ひて、之を執へ、喉を扼めて曰へり、爾が負ふ所を我に償へ。二九其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰へり、我を寬うせよ、我盡く爾に償はん。三〇然れども、彼肯はず、乃往きて、其債を償ふに至るまで、之を獄に下せり。三一佗の同僚之を見て、甚憂ひ、來りて有りし處を悉く主に告げたり。三二其時主は彼を召して曰く、悪しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債を悉く爾に免せり、三三我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非ずや。三四主乃怒りて、其悉くの債を償ふに至るまで、彼を獄吏に付せり。三五若し爾等各其心より己の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に行はん。

第十九章 一 イエス此等の言を竟りて、ガリレヤを出で、イオルダンの外よりイウデヤの境に來れり。二多くの民彼に従ひしに、彼は彼處に於て彼等を醫せり。三ファリセイ等就きて、彼を試みて曰へり、人何の故を論ぜず、其妻を出すは宜しきか。四彼答へて曰へり、爾等元始に人を造りし者は、之を男女に造れりと讀まざりしか。五又曰へり、是の故に人は其父母を離れ、其妻に著きて、二の者一體と爲らん、六然らば彼等は既に二人に非ず、乃一體なり、故に神の耦せし者は、人之を分つ可からず。七彼等曰く、然らばモイセイが離書を與へて、之を出すを命ぜしは何ぞや。八彼は之に謂ふ、モイセ

イは爾等の殘忍なるに因りて、爾等に妻を出すを容せり、然れども元始には斯くあらざりき。九 我爾等に語り、淫の故に非ずして、其罪を出し、他に娶る者は、姦淫を行ふなり、出されたる婦を娶る者も、姦淫を行ふなり。一〇 其門徒彼に謂ふ、若し人の其妻に於ける本分はくの如くば、寧娶らざらん。一一 彼曰へり、此の言は、人皆納るるに非ず、乃賦へられたる者のみ。一二 蓋母の胎より生れつきたる闇者あり、又人より闇せられたる闇者あり、又天國の爲に自ら闇せし闇者あり、之を納るるを能する者は納るべし。一三 時に幼兒をイススに攜へ來りて、彼等に其手を按せて、禱らんことを求むる者ありしに、門徒之を戒めたり。一四 然れどもイスス曰へり、幼兒を容して、我に就くを禁ずる母れ、蓋天國は是くの如き者に屬す。一五 乃彼等に手を按せて、彼處を去れり。一六 視よ、或人彼に就きて曰へり、善なる師よ、我永遠の生命を得ん爲に、何の善き事を爲すべきか。一七 彼は之に謂へり、爾は何ぞ我を善と稱ふる、獨神より外に善なる者なし、爾若し生命に入らんと欲せば、誠を守れ。一八 彼曰く、何の誠ぞ。イスス曰へり、殺す母れ、淫する母れ、竊む母れ、妄證する母れ、一九 爾の父母を敬へ、又爾の隣を愛すること己の如くせよ。二〇 少き者彼に謂ふ、我幼より皆之を守れり、尚足らざる者は何ぞや。二一 イスス之に謂へり、爾完全ならんと欲せば、往きて、爾の所有を售りて、貧者に施せ、然らば財を天に有

たん、且來りて我に従へ。二三 少き者此の言を聞きて、憂ひて去れり、大なる資産を有てる故なり。二四 又爾等に語り、駱駝が針の孔を穿るは、富める者が天國に入るに難し。二五 門徒之を聞きて、甚驚きて曰へり、然らば誰か能く救はれん。二六 イスス目を注ぎて、彼等に謂へり、此れ人には能せざる所なり、唯神に能せざる所なし。二七 其時ペトル答へて彼に謂へり、視よ、我等一切を捨てて、爾に従へり、然らば我等何を得んか。二八 イスス彼等に謂へり、誠に爾等に語り、爾等我に従へる者は、復生の時、人の子が其光榮の位に坐するに及びて、亦十二の位に坐して、イスライリの十二支派を審判せん。二九 凡そ我が名の爲に家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は子、或は田疇を捨つる者は、百倍を受け且永遠の生命を嗣がん。三〇 唯多く先なる者は後になり、後なる者は先にならん。

第二十章 一 蓋天國は其葡萄園に工人を傭はん爲に、朝早く出でたる家主の如し。二 工人と一日に銀一枚を約して、彼等を其葡萄園に遣せり。三 第三時の頃出でて、別に市に空しく立てる者を見て、四之に謂へり、爾等も我が葡萄園に往け、我至當の者を爾等に與へん、彼等往けり。五 又第六時及び第九時の頃に出でて、是くの如

く行へり。六 第十一時の頃出でて、別に空しく立てる者に遇ひて、之に謂ふ、爾等何ぞ終日此に空しく立てる。七 彼等曰く、我等を備ふ者なかりし故なり。彼は之に謂ふ、爾等も我が葡萄園に往け、然らば至當の者を受けん。八 暮に及びて、葡萄園の主其家宰に謂ふ、工人を呼びて、其値を給せよ、後なる者より始めて、先なる者に及べ。九 第十一時の頃の者來りて各銀一枚を受けたり。一〇 先の者來りて意へらく、是より多く受くるならんと、然れども彼等も各銀一枚を受けたり。一一 之を受けて、家主を怨みて二 曰へり、此の後なる者は一時のみ勞きしに、爾は彼等を終日の苦勞と暑とを忍びたる我等と等しくせり。一三 彼其一人に答へて曰へり、友よ、我爾に義ならざることを爲さず、爾は我と銀一枚を約せしに非ずや、一四 爾の物を取りて往け、我此の後なる者には、爾と等しく與へんと欲す。一五 或は我の物を以て、我が欲する如く行ふは宜しからずや、抑我が善きに因りて、爾の目悪しきか。一六 是くの如く後なる者は先になり、先なる者は後にならん、蓋召されたる者は多けれども、選ばれたる者は少し。一七 イイススイエルサリムに上る時、途中獨十二門徒を招きて、之に謂へり、一八 視よ、我等イエエルサリムに上る、人の子は司祭諸長及び學士等に付されん、彼等之を死に定め、一九 之を異邦人に付して、辱め、鞭ち、十字架に釘せしめん、而して彼第三日に復活せん。二〇 時にゼワエデイの子の母、其子と偕

に彼に就きて、拜して求むる所あり。二一 彼は之に謂へり、爾何を欲するか。曰く、我が此の二人の子が爾の國に於て、一は爾の右に、一は爾の左に坐せんことを許せ。二二 イイスス答へて曰へり、爾の求むる所を知らず、爾等我が飲まんとする爵を飲むことを能するか、我が受くる洗を受くることを能するか。彼等曰く、能す。二三 彼は之に謂ふ、爾等は我が爵を飲み、我が受くる洗を受けん、然れども我が右、我が左に坐することは、我が與ふべきに非ず、乃我が父より備へられたる者に與へられん。二四 十門徒之を聞きて、二人の兄弟を熅れり。二五 イイスス彼等を召して曰へり、諸民王侯其民を主り、大人等其上に權を執るは、爾等の知る所なり、二六 唯爾等の中には斯くある可からず、乃爾等の中に大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し。二七 爾等中に首たらんと欲する者は、爾等の僕と爲るべし、二八 蓋人の子の來りしは、人を役はん爲に非ず、乃人に役はれ、且己の生命を與へて、衆くの者の贖を爲さん爲なり。二九 彼等イエリホンを出づる時、衆くの民彼に従へり。三〇 視よ、道の旁に坐せる二人の瞽者、イイススの過ぐるを聞きて、呼びて曰へり、主ダワイドの子よ、我等を憐め。三一 民彼等を禁めて、默さしむれども、彼等愈呼びて曰へり、主ダワイドの子よ、我等を憐め。三二 イイスス止りて、彼等と呼ばて曰へり、我が爾等に何を爲さんことを欲するか。三三 彼等曰く、主よ、我等の目の啓か

れんことを。三四 イイスス憫みて、彼等の目に觸れたれば、目直に見るを得て、彼等イイススに従へり。

第二十一章　一 イエルサリムに近づき、橄欖山に廻く、ワイファギヤに來りし時、イイスス二人の門徒を遣して、二之に謂へり、爾等の前なる村に往け、直に繋ぎたる牝驢 及び之と偕に在る小驢に遇はん、之を解きて、我に牽き來れ。三 若し爾等を詰る者あらば、主之を需むと言へ、然らば直に之を遣さん。四 此れ皆成りしは、預言者を以て言はれし事に應ふを致す、曰く、五 シオンの女に告げて云へ、視よ、爾の王は溫柔にして、牝驢 及び重任を負ふ者の子なる、小驢に乗りて、爾に臨むと。六 門徒往きてイイススの命ぜし如く行ひ、七 牝驢 及び小驢を牽き來りて、己の衣を其上に置き、彼其上に乘れり。八 衆くの民は己の衣を途に布き、他の者は樹の枝を伐りて途に布けり。九 且前に行き後に従ふ民は呼びて曰へり、ダワイドの子に「オサンナ」、主の名に因りて來る者は祝福せらる、至高きに「オサンナ」。一〇 彼がイエルサリムに入りし時、城擧りて騒ちて曰へり、此れ誰ぞや。二 民曰へり、此れイイスス、ガリラヤのナザレトの預言者なり。三 イイスス神の殿に入りて、其中に貿易する者を悉く逐ひ出し、兌換する者の案と鴿を鬻ぐ者の椅とを倒して、二三 彼等に謂へり、我が家は祈禱の家に稱へられん

と録されたるに、爾等之を盜賊の巢窟と爲せり。一四 瞽者及び跛者殿に於て彼に就きたれば、彼之を醫せり。一五 司祭諸長と學士等とは、其行ひし奇蹟を見、又童子等が殿に呼びて、ダワイドの子に「オサンナ」と云ふを見て、憤りて一六 彼に謂へり、爾此の輩の言ふと所を聞くか。イイスス彼等に謂ふ、然り、爾等未だ、爾は嬰兒と哺乳兒との口より讚美を備へたりと、云へるを讀まざりしか。一七 遂に彼等を離れて、城の外に出で、ワイファニヤに至りて、彼處に宿れり。一八 朝に及びて、城に返る時飢ゑたり。一九 道の旁に一の無花果樹の在るを見て、之に近づきしに、一も得る所なし、唯葉あるのみ、乃之に謂ふ、今より後永く果を結ばざれ、無花果樹 立に枯れたり。二〇 門徒之を見て、奇として曰へり、無花果樹何ぞ立に枯れたる。二一 イイスス答へて彼等に謂へり、我誠に爾等に語く、爾等若し信ありて疑はずば、唯無花果樹に於ける事を行はんのみならず、乃此の山に、移りて海に投ぜよと、云ふとも、亦成らん。三二 且凡そ祈禱の時信じて求むる所は、悉く之を得ん。三三 彼が殿に來りて教ふる時司祭諸長と民の長老等と彼に就きて曰へり、爾何の權を以て是を行ふか、誰か爾に此の權を與へたる。三四 イイスス答へて彼等に謂へり、我も亦一言爾等に問はん、若し之を我に語げば、我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げん。三五 イオアンの洗禮は奚よりせしか、天よりか、抑人よりか。彼等竊に議して曰

へり、若し天よりと云はば、爾等何ぞ彼を信ぜざりしと云はん、二六
若し人よりと云はば、我等民を畏る、蓋皆イオアンを以て預言者と
するなり。二七遂にイイススに答へて曰へり、知らず。彼も亦之に謂
へり、我も何の權を以て是を行ふか爾等に語げざらん。二八然れど
も爾等如何に意ふか、或人に二人の子あり、其第一の者に就きて曰
へり、子よ、往きて、今日我が葡萄園に工作せよ。二九彼答へて曰へ
り、我欲せず、然れども後悔いて往けり。三〇又第二の者に就きて、是
くの如く言ひしに、彼答へて曰へり、主よ、我往く、而して往かざ
りき。三一二人の中孰か父の旨を行ひたる。曰く、第一の者なり。
イイスス彼等に謂ふ、我誠に爾等に語ぐ、税吏と娼妓とは爾等に
先だちて、神の國に往く。三二蓋イオアン義の道を以て爾等に來り
しに、爾等彼を信ぜざりき、然れども税吏と娼妓とは彼を信ぜり、
爾等は之を見たる後も、仍悔いせず、又彼を信ぜず。三三爾等復一
の譬を聽け、家主あり、葡萄園を植ゑ、之に籬を環らし、其中に酒榨
を掘り、塔を建て、之を園丁に託して、他方に往けり。三四果期近
づきたれば、彼は其果を收めん爲に、諸僕を園丁に遣ししに、三五
園丁は其僕を執へて、或者の者を打ち、或者を殺し、或者を石にて撃てり。
三六復他の僕を先より多く遣ししに、之にも是くの如く行へり。三七
遂に己の子を彼等に遣して曰へり、我が子に愧ぢんと。三八然れど
も、園丁子を見て、相語りて曰へり、此れ嗣子なり、往きて、彼を殺

して、其嗣業を取らん。三九乃彼を執へて、葡萄園の外に曳き出し
て殺せり。四〇然らば葡萄園の主來らん時、何をか此の園丁に行は
ん。四一彼等曰く、此の悪しき者を情なく滅し、葡萄園を以て他の
園丁、即時に及びて彼に果を收めん者に託せん。四二イイスス彼等
に謂ふ、爾等は聖書に、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり、此
れ主の爲す所にして、我等の目に奇異なりとすと、云ふを未だ嘗て讀
まざりしか。四三故に我爾等に語ぐ、神の國は爾等より奪はれて、
其果を結ぶ民に與へられん。四四且此の石の上に倒るる者は壞られ、
此の石の其上に墜つる者は碎かれん。四五司祭諸長とファリセイ等
と彼の譬を聞きて、其彼等を指して言ふを悟り、四六彼を執へんと謀
りたれども、民を懼れたり、蓋民は彼を以て預言者とせり。

第二十二章 一 イイスス又譬を以て彼等に語りて曰へり。二天國は
其子の爲に婚筵を設けたる君王の如し。三彼其諸僕を遣して、召さ
れし者を婚筵に招きたれども、彼等來るを欲せざりき。四又他の僕を
遣して曰へり、召されし者に告げて云へ、視よ、我已に餐を具へ、我
が牛と肥たる畜と已に宰りて、一切備はれり、婚筵に來れ。五然れ
ども彼等は顧みずして、或者は其田に、或者は其貿易に往けり、六餘
の者は彼の諸僕を執へ辱しめて、之を殺せり。七王之を聞きて怒り、
其軍を遣して、彼の兇人を滅し、彼等の邑を燬けり。八時に彼其

諸僕に謂ふ、婚筵備はりたれども、召されし者は堪へず、九故に爾等通衢に往きて、遇はん者を悉く婚筵に招け。一〇其僕途に出でて、凡そ遇ひたる者、悪しきと善きとを問はず、之を集めれば、婚筵に席坐する者満ちたり。一一王は席坐する者を觀ん爲に入りて、彼處にひとり一人の婚禮の服を衣ざる者あるを見て、一二之に謂ふ、友よ、爾何ぞ婚禮の服を衣ずして此に入りたる、彼默然たり。一三其時王は役者に謂へり、彼の手足を縛りて、彼を取りて、外の幽暗に投ぜよ、彼處に哀哭と切齒とあらん。一四蓋召されたる者は多けれども、選ばれたる者は少し。一五其時ファリセイ等往きて、如何にして彼を其言に因りて罾せんと謀れり。一六遂に己の門徒をイロドの黨と偕に彼に遣して曰く、師よ、我等は爾が眞なる者にして、眞に神の道を教へ、何人にも偏らざるを知る、蓋爾は貌を以て人を取らず。一七故に我等に語げよ、爾如何に憶ふか、税をケサリに納むるは宜しや否や。一八イイスス其惡意を知りて曰へり、偽善者よ、何ぞ我を試みる、一九税金を我に示せ。彼等銀一枚を攜へ來れるに、二〇彼曰く、斯れ誰の像と號なるか。二一曰く、ケサリの。是に於て彼等に謂ふ、然らばケサリの物をケサリに納め、神の物を神の納めよ。二三彼等之を聞きて奇と爲し、彼を離れて去れり。二四是の日サッドウケイ等、即復活なしと言ふ者、彼に就きて、問ひて二四曰く、師よ、モイセイ云へり、人子なくして死せば、其兄弟其妻を娶りて、兄弟の嗣

を興すべしと。二五我等の中に兄弟七人ありしが、第一の者娶りて死し、子なきが故に其妻を弟に遺せり。二六其二、其三、其七に至るまで皆然し。二七其後妻も亦死せり。二八然らば復活には、此の婦は七人中誰の妻と爲らんか、蓋し皆之を娶れり。二九イイスス彼等に答へて曰へり、爾等は聖書をも神の能をも知らずして迷へり。三〇蓋復活には娶らず、嫁がず、乃神の使等の如く天に在るなり。三一死者の復活に付きては、神が爾等に語げて、三二我はアウラムの神、イサクの神、イアコフの神なりと、言ひしことを爾等未だ讀まざりしか、神は死者の神に非ず、乃生者の神なり。三三民間きて其訓を奇とせり。三四ファリセイ等は、彼がサッドウケイ等に言なからしめたりと聞きて、相集れり。三五其中なる一人の律法師彼を試みて、問ひて曰へり、三六師よ、律法の中に何の誠か大なる。三七イイスス之に謂へり、爾心を盡し、靈を盡し、意を盡して、主爾の神を愛せよ、三八此れ誠の第一にして大なる者なり。三九第二は是に同じき者、即爾の鄰を愛すること己の如くせよ。四〇斯の二の誠には悉くの律法と預言者と繋れり。四一ファリセイ等の集りし時、イイスス之に問ひて四二曰へり、爾等ハリストスの事を如何に意ふか、彼は誰の子なるか。曰く、ダويدの子なり。四三彼曰く、然らば如何ぞダويدは、聖神に由りて、彼を主と稱ふる、云く、四四主我が主に謂へり、爾我が右に坐して、我が爾

の敵を爾の足の蹻と爲すに迄れと。四五然らばダワイド彼を主と稱ふれば、如何ぞ彼は其子たる。四六一人も之に言を答ふる能はず、是の日より敢て復彼に問ふ者なかりき。

第二十三章 一當時イイス民及び其門徒に語りて曰へり。二モイ

セイの位に學士及びファリセイ等は坐せり。三故に彼等が凡そ爾等に守らんことを命ずる者は、守りて之を行へ、然れども彼等の行に效ふ勿れ、蓋彼等は言ひて行はず。四彼等は重く且負ひ難き任を縛りて、人の肩に負はすれども、己は一の指を以てすら、之を動かすを欲せず。五凡そ彼等が行ふ所は、人に見られん爲に行ふ、其佩經を闊くして、其衣の裾を大にす。六又筵には上席、會堂には首座、七街衢には問安、人人よりは夫子夫子と稱へらるるを好む。八然れども爾等は夫子と稱へらるる勿れ、蓋爾等の師は一、即ハリストスなり、爾等は皆兄弟なり。九亦地に在る者を父と稱ふる勿れ、蓋爾等の父は一、即天に在る者なり。一〇亦導師と稱へらるる勿れ、蓋爾等の導師は一、即ハリストスなり。一一爾等の中に大なる者は爾等の役者となるべし。一二蓋自ら高くする者は、卑くせられ、自ら卑くする者は、高くせられん。一三禍なる哉爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は天國を人の前に閉ぢて、自ら入らず、入らんと欲する者にも入るを許さず。一四禍な

る哉爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、爾等は嫠の家を呑み、伴りて長き祈を爲す、是に由りて更に重き定罪を受けん。一五禍なる哉爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等はひとり人を教に進ましめん爲に、海陸を巡り、既に進めば、彼を爾等に倍したる地獄の子と爲す。一六禍なる哉爾等、誓なる嚮導者よ、爾等は云ふ、人若し殿を指して誓はば、事なし、殿の金を指して誓はば、償ふべしと。一七愚にして誓なる者よ、孰か大なる、金か、抑金を聖ならしむる殿か。一八又云ふ、人若し祭壇を指して誓はば、事なし、其上の禮物を指して誓はば、償ふべしと。一九愚める祭壇か。二〇故に祭壇を指して誓ふ者は、祭壇及び凡そ其上に在る者を指して誓ふなり、二二又殿を指して誓ふ者は、殿及び其中に居る者を指して誓ふなり、二三又天を指して誓ふ者は、神の寶座及び其上に坐する者を指して誓ふなり。二四禍なる哉爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は薄荷、茴香、馬斤の十分の一を納めて、律法の尤重き義と仁と信とを遺てたり、此れ行ふ可きなり、彼も亦遺つ可からず。二五禍なる哉、爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は杯と皿との外を潔むれども、其内に貪婪と不義と充てり。二六誓なるファリセイよ、先づ杯と皿との内

を潔めよ、其外も潔くならん爲なり。二七 禍なる哉爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は白く塗りたる塗に似たり、外は美しく見ゆれども、内は骸骨と汚穢と充てり。二八 是くの如く爾等も外は人人に義なる者と見ゆれども、内は偽善と不法と充てり。二九 禍なるかな爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は預言者の塗を建て、義者の墓を飾り、三〇 且云ふ、我等若し我が先祖の日に在りしならば、彼等が預言者の血を流すことに與せざりしならんと。三一 是くの如く爾等は自ら己が預言者を殺しし者の子たるを證す。三二 爾等先祖の量を充たせ。三三 蛇蝮の類よ、爾等安ぞ地獄の定罪を追れん。三四 故に視よ、我爾等に預言者と智者と學士とを遣す、而して爾等は其中或者を殺し、又は十字架に釘し、或者を爾等の會堂に鞭ち、又は邑より邑に逐はん、三五 凡そ地上に流されし義人の血、義なるアワエリの血より、爾等が殿と祭壇との間に殺ししワラヒヤの子ザハリヤの血に至るまで、皆爾等に歸せん爲なり。三六 我誠に爾等に語り、此等皆斯の代に歸せん。三七 イエルサリムよ、イエルサリムよ、預言者を殺し、爾に遣されし者を石にて撃つ者よ、我幾次か母鶏が其雛を翼の下に集むる如く、爾の諸子を集めんと欲したれども、爾等は欲せざりき。三八 視よ、爾等の家は虚しくして爾等に遺さる。三九 蓋我爾等に語り、今より後、主の名に因りて來る者は祝福せらると、云ふに至るまで、爾等我を見ざら

ん。

第二十四章 イイスス出でて、殿より往けるに、其門徒彼に就きて、殿の造構を觀さんとせり。ニ イイスス彼等に謂へり、爾等盡く此等の者を見るか、我誠に爾等に語り、此には一の石も石の上に遺らずして、皆く圮されん。三 彼が橄欖山に坐せる時、門徒私に彼に就きて曰へり、請ふ、我等に告げよ、何の時に此の事あらん、又爾の降臨と世の終末との兆は如何なるか。四 イイスス彼等に答へて曰へり、慎みて人に惑はさるる勿れ。五 蓋多くの者は我が名を冒して來り、我はハリストスなりと云ひて、多くの者を惑はさん。六 又爾等戰と戰の風聲とを聞かん、慎みて懼るる勿れ、蓋此れ皆有るべし、唯此れ尚末期には非ず。七 蓋民は民を攻め、國は國を攻めん、饑饉、疫病、地震處處に在らん。八 此れ皆苦難の始なり。九 其時人爾等を艱苦に付し、爾等を殺し、爾等我が名の爲に萬民に憎まれん。一〇 其時多くの者は躓き、相付し、相憎まん。一一 又多くの偽預言者起りて、多くの者を惑はさん。一二 不法の増すに因りて、多くの者の愛は冷にならん。一三 唯終に至るまで忍ぶ者は救はれん。一四 又此の天國の福音は徧く天下に傳へられん、萬民に證を爲さん爲なり、然る後末期至らん。一五 故に爾等預言者ダニイルを以て言はれたる荒廢の憎むべき物の聖處に立つを見ば、(讀む者悟るべし、)

一六 其時イウデヤに在る者は山に通るべし、一七 屋の上の在る者は、其家より物を取らん爲に、下るべからず、一八 田に在る者は、其衣を取らん爲に、歸るべからず。一九 當日には妊める者と乳を嘔まする者と禍なる哉。二〇 爾等の遁ぐることの冬或は安息日に在らざらん爲に祈れ。二一 蓋其時大なる患難あらん、世界の始より今に至るまで、未だ此くの如きはあらざりき、後も亦あらざらん。二二 若し其日減ぜられずば、凡の肉身の救はるる者なからん、然れども選ばれたる者の爲に其日減ぜられん。二三 其時若し人爾等に告げて、視よ、ハリストス此に在り、或は彼に在りと云はば、信ずる勿れ。二四 蓋僞ハリスト及び僞預言者起りて、大なる奇徴と奇蹟とを施し、若し能すべくば、選ばれたる者をも惑はずに至らん。二五 視よ、我預め爾等に言へり。二六 故に若し爾等に告げて、視よ、彼は野に在りと云ふ者あらば、出づる勿れ、視よ、彼は密室に在りと云ふ者あらば、信ずる勿れ。二七 蓋電の東より發して、西にまで閃くが如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。二八 蓋屍の在る所には、鷲集らん。二九 其日の患難の後、忽日は晦み、月は其光を施さず、星は天より隕ち、天勢は震ひ動かん。三〇 其時人の子の記號は天に現れん、其時地上の諸族は哭き哀み、人の子が、權能と大なる光榮とを以て、天の雲に乗りて來るを見ん。三一 彼は其天使等を大なる光榮の菰と與に遣し、彼等は其選ばれたる者を

四 風より集めて、天の此の極より彼の極に至らん。三二 無花果樹の譬を學べ、其枝已に柔にして葉萌せば、爾等夏の近きを知る。三三 是くの如く爾等凡そ此等の事を見ば、時の近くして、門に在るを知れ。三四 我誠に爾等に語ぐ、此の世未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。三五 天地は廢せん、然れども我が言は廢せざらん。三六 其日其時は、之を知る者なし、天の使等も知らず、唯我が父のみ之を知る。三七 然れどもノイの日の如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。三八 蓋洪水の先の時、ノイの方舟に入る日まで、人人食ひ飲み、娶り嫁ぎて、三九 洪水の來りて、盡く彼等を滅すに至るまで、知らざりし如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。四〇 其時二人田に在らんに、一人は取られ、一人は遺さる。四一 二人の婦磨を旋かに、一人は取られ、一人は遺さる。四二 故に儼醒せよ、爾等の主の何の時に來るを知らざればなり。四三 若し家主盜賊の何の更に來るを知らば、儼醒して、其家を穿つを許さざらん、是れ爾等の知る所なり。四四 是の故に爾等も己を備へよ、蓋爾等が意はざる時に人の子來らん。四五 孰か忠にして智なる僕、其主が諸僕の上に立てて、時に隨ひて彼等に糧を與へしむる者たる。四六 主の來る時、彼が斯く行ふを見ば、其僕福なり。四七 我誠に爾等に語ぐ、彼を立てて其一切の所有を督らしめん。四八 然れども若し其惡しき僕、心の中に我が主の來るは遅からんと曰ひて、四九 其同僚を打ち、酒徒と

偕ともに食飲くひのみせば、五〇 乃すなはち俟まちたざる日ひ、知らざる時に、其僕そのぼくの主來りて、
五二 彼かれを斷たち、彼かれを偽善者ぎぜんしやと同じき分に處しよせん、彼處かしこに哀哭なきと切齒はがみと
あらん。

第二十五章 一 厥時そのとき天國てんこくは、燈ともしびを執りて、出でて新娶者はなむこを迎むかふる

十人の處女しよぢよの如ごとくならん。二 其中そのうちの五人ごにんは智さとく、五人ごにんは愚おろかなり。

三 愚おろかなる者は其燈そのともしびを執りて、己おのれと偕ともに油あぶらを取らざりき。四 智さとき者もの
は其燈そのともしびと偕ともに其器そのつばに油あぶらを取れり。五 新娶者はなむこは遅おそなはるに依りて、
皆假寐みなかりねして眠ねむれり。六 中夜呼ちゆうやぶ聲こゑありて曰いはく、視みよ、新娶者はなむこ來きたる、出
でて彼かれを迎むかへよ。七 其時そのとき處女しよぢよ皆起みなおききて、其燈そのともしびを整ととのへたり。八 愚おろか

なる者は智さとき者に謂いへり、爾等なんぢらの油あぶらを分けて我等われらに與あたへよ、蓋我等けだしわれら
の燈ともしびは熄きゆ。九 智さとき者もの答こたへて曰いはく、恐おそらくは我等われらと爾等なんぢらとに足たら

ざらん、寧賣むしろうる者に往ゆきて、己おのれの爲ために買かへ。一〇 彼等かれら往ゆきて買かふ時とき、
新娶者はなむこ來り、備そなへを爲なしし者もの彼と偕ともに婚筵こんえんに入りて、門閉もんとざされた

り。一一 後其餘のちそのよの處女しよぢよも來りて曰いはふ、主しゆよ、主しゆよ、我等われらの爲ために啓ひらけ。

一二 彼答かれこたへて曰いはへり、我誠われまことに爾等なんぢらに語つぐ、我爾等われなんぢらを識しらずと。一三 故ゆゑ

に徹醒けいせいせよ、蓋爾等けだしなんぢらは何なんの日ひ、何なんの時ときに、人の子ひとの來きたらんことを知し

らず。一四 蓋彼けだしかれは、他の地たに往ゆかんとして、其諸僕そのしよぼくを召めし、彼等かれらに
其所有そのしやうを託たくしたる人の如ごとし。一五 一人ひとりには銀五千ぎんごせん、一人ひとりには二千にせん、
一人ひとりには一千いっせん、各其才能おのおのそのさいのうに應おうじて、之これを與あたへて、直ただちに起たち行ゆけ

り。一六 五千ごせんを受けし者は往ゆきて、之これを用もちて、他に五千ごせんを獲えたり。

一七 二千にせんを受けし者ものも亦また二千にせんを獲えたり。一八 唯一千ただいっせんを受けし者ものは往ゆ

きて、之これを地ちに埋うづつて、其主そのしゆの銀ぎんを藏かくせり。一九 久ひさしくして後のち、此この
諸僕しよぼくの主歸りて、彼等かれらと會計くわいけいせり。二〇 五千ごせんを受けし者は他に五千ごせん

を攜たづせて、就つきて曰いはく、主しゆよ、爾五なんぢご千せんを我われに託たくせり、視みよ、我之われこれ
を以て他に五千ごせんを獲えたり。二二 其主そのしゆ彼かれに謂いへり、善よい哉かな、善ぜんにして忠ちゆう

なる僕ぼくよ、爾なんぢは寡すくなき者に於おいて忠ちゆうなり、我爾われなんぢに多おほく者ものを督つかさどらしめ
ん、爾なんぢが主しゆの歡樂よろこびに入れ。二三 二千にせんを受けし者ものも亦また就つきて曰いはへり、主しゆ

よ、爾なんぢは二千にせんを我われに託たくせり、視みよ、我之われこれを以て二千にせんを獲えたり。二三
其主そのしゆ彼かれに謂いへり、善よい哉かな、善ぜんにして忠ちゆうなる僕ぼくよ、爾なんぢは寡すくなき者に於おい

て忠ちゆうなり、我爾われなんぢに多おほく者ものを督つかさどらしめん、爾なんぢが主しゆの歡樂よろこびに入れ。
二四 一千いっせんを受けし者ものも亦また就つきて曰いはへり、主しゆよ、我爾われなんぢが嚴酷げんこくなる人ひとに

して、播まかざりし處ところに穫かり、散ちらさざりし處ところに聚あつむるを知しれり、二
五是ごこを以て我懼われおそれて、往ゆきて、爾なんぢの銀ぎんを地ちに藏かくせり、視みよ、爾なんぢの物もの

は爾之なんぢこれを有たもてり。二六 主しゆ彼かれに答こたへて曰いはへり、惡あしくして惰おこたれる僕ぼくよ、
爾なんぢは我わが播まかざりし處ところに穫かり、散ちらさざりし處ところに聚あつむるを知しれり、

二七 故ゆゑに我わが銀ぎんを貿易者ぼうえきしやに託たくすべかりしなり、然しからば我來りて、本銀もとぎん
と利りを受けしならん。二八 故ゆゑに彼かれより一千いっせんを取りて、十千じふせんを有も

る者に與あたへよ。二九 蓋けだし凡およそ有もてる者ものには與あたへて、餘あまりあらしめ、有も
たざる者ものよりは其有そのもてる物ものも奪うばはれん。三〇 無益むえきなる僕ぼくを外の幽暗くらやみに

投ぜよ。彼處には哀哭と切齒とあらん。言ひ畢りて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。三一 人の子は、其光榮を以て、諸の聖なる天使と偕に來らん時、其光榮の寶座に坐し、三二 萬民彼の前に集り、而して彼は、牧者の綿羊を山羊より別つが如く、彼等を相別ちて、三三 綿羊を其右に、山羊を其左に置かん。三四 其時王は右に在る者に謂はん、我が父に祝福せられし者よ、來りて、創世以來爾等の爲に備へられたる國を嗣げ。三五 蓋我が飢ゑし時、爾等我に食はせ、我が渴きし時、我に飲ませ、我が旅せし時、我を宿らせ、三六 我が裸なりし時、我に衣せ、我が病みし時、我を顧み、我が獄に在りし時、我に來れり。三七 時に義人等彼に答へて曰はん、主よ、我等何時爾の飢うるを見て、食はせ、或は渴くを見て、飲ませしか。三八 何時爾の旅するを見て、宿らせ、或は裸なるを見て、衣せしか。三九 何時爾の病み、或は獄に在るを見て、爾に來りしか。四〇 王彼等に答へて曰はん、我誠に爾等に語ぐ、爾等が之を我が此の至と小き兄弟の一人に行ひしは、卽我に行ひしなり。四一 其時又左に在る者に謂はん、誑はれし者よ、我を離れて、惡魔及び其使等の爲に備へられたる永遠の火に往け。四二 蓋我が飢ゑし時、爾等我に食はせず、我が渴きし時、我に飲ませず、四三 我が旅せし時、我を宿らせず、我が裸なりし時、我に衣せず、我が病み、又は獄に在りし時、我を顧みざりき。四四 時に彼等も答へて曰はん、主よ、我等何時爾の飢ゑ、

或は渴き、或は旅し、或は裸なる、或は病み、或は獄に在るを見て、爾に事へざりしか。四五 其時彼等に答へて曰はん、我誠に爾等に語ぐ、爾等が之を此の至と小き者の一人に行はざりしは、卽我に行はざりしなりと。四六 此等の者は永遠の苦に往き、義人等は永遠の生命に往かん。

第二十六章 一 イイスス悉く此等の言を竟へて、其門徒に謂へり、二 爾等知る、二日の後は逾越節なり、人の子は十字架に釘せらるる爲に付されん。三 其時司祭諸長と學士等と民の長老等とは、カリアアアと名づくる司祭長の中庭に集り、四 詭計を用ゐてイイススを執へて、之を殺さんと謀れり。五 唯曰へり、節期に於てすべからず、恐らくは民の中に亂は起らん。六 イイススワイファニヤに於て、癩者シモンの中に在りし時、七一 の婦價貴き香膏を盛れる玉の盒を攜へ、彼の席坐に就きて、其首に沃げり。八 門徒之を見て熨りて曰へり、此の糜費を爲すは何の爲ぞ、九 蓋此の香膏は多くの價に賣りて、貧しき者に施すを得しならん。一〇 イイスス之を知りて、彼等に謂へり、何ぞ婦を擾す、彼は我が爲に善き功を爲せり、一一 蓋貧しき者は常に爾等と偕にす、我は常に爾等と偕にするにあらず。一二 彼は此の香膏を我が體に沃ぎて、我を葬に備へたり。一三 我誠に爾等に語ぐ、全世界の中、凡そ此の福音の傳へ

られん處には、此の婦の爲しし事の述べられて其記念と爲らん。一
四 其時十二の一、イウダ「イスカリオト」と名づくる者、司祭諸長
に往きて、一五 日へり、爾等我に幾何を與へんと欲するか、我彼を
爾等に付さん、彼等は之に銀三十を約せり。一六 其時より彼を付さ
ん爲に好き機を窺へり。一七 除酵節の首の日、門徒イイススに就
て曰へり、我等が何處に爾の爲に逾越節筵を備へんことを欲するか。
一八 彼曰へり、城に往き、某に至りて曰へ、師言ふ、我が時近し、
我門徒と偕に爾の家に逾越節筵を行はんと。一九 門徒イイススの命
ぜし如く行ひて、逾越節筵を備へたり。二〇 暮に及びて、彼十二門徒
と偕に席坐せり。二一 食する時、彼曰へり、我誠に爾等に語ぐ、
爾等の中の一人は我を賣らん。二二 彼等大に憂ひて、各彼に謂
へり、主よ、是れ我に非ずや。二三 答へて曰へり、我と偕に手を盂に著
けし者は、此の人我を賣らん。二四 人の子は逝く、之を指して録され
しが如し、唯人の子を賣る者は禍なる哉、斯の人生れざりしならば、
彼の爲に善かりしならん。二五 彼を賣るイウダも問ひて曰へり、夫子、
是れ我に非ずや。曰く、爾言へり。二六 彼等が食する時、イイスス餅
を取り、祝福して、之を擘き、門徒に與へて曰へり、取りて食へ、是
れ我の體なり。二七 又爵を取り、感謝して彼等に與へて曰へり、皆之
を飲め、二八 蓋是れ我の新約の血、衆くの人爲に流さるる者、罪
の赦を得るを致す。二九 我爾等に語ぐ、今より後、我復此の葡萄の實

より飲まずして、我が父の國に於て、爾等と偕に、新しき者を飲む日
に至らん。三〇 既に詠ひて、橄欖山に往けり。三一 其時イイスス彼等
に謂ふ、爾等皆今夜我の爲に躓かん、蓋録せるあり、我牧者を撃
たん、而して群の羊は散らんと。三二 我が復活の後、我爾等に先
だちてガリレヤに往かん。三三 ペトル彼に答へて曰へり、皆爾の爲
に躓くとも、我は永く躓かざらん。三四 イイスス彼に謂へり、我誠
に爾に語ぐ、今夜鶏の鳴かざる先に、爾三次我を諱まん。三五
ペトル彼に謂ふ、我爾と偕に死すとも、爾を諱まざらん、門徒皆亦是
くの如く言へり。三六 其時イイスス彼等と偕に、ゲフシマニヤと名づ
くる處に來りて、門徒に謂ふ、爾等此に坐して、我が彼處に往きて祈
るを待て。三七 乃ペトル及びゼワエデイの二人の子を攜へて、
憂哀を催せり。三八 時にイイスス彼等に謂ふ、我が靈憂ひて死
に近づけり、爾等此に在りて、我と偕に儆醒せよ。三九 乃少しく離
れて、俯伏して、祈りて曰へり、我が父よ、若し能すべくば、願はく
は此の爵は我を過ぎん、然れども、我が欲する如くならずして、爾
の欲する如くなるべし。四〇 遂に門徒に來りて、其寢ぬるを見て、ペ
トルに謂ふ、爾等斯く一時も我と偕に儆醒する能はざりしか。四一
儆醒せよ、祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり、神は勇めども、肉體
は弱し。四二 再往きて、復祈りて曰へり、我が父よ、若し此の爵、
我之を飲まずして、我を過ぐる能はずば、爾の旨成るべし。四三 來

りて、復彼等の寝ぬるを見る、其目倦みたればなり。四四 彼等を離れて、復往き、同じき言を言ひて、三次祈れり。四五 其時門徒に來りて、之に謂ふ、爾等尚寝ねて休むか、視よ、時は邇づけり、人の子は罪人の手に付きたる。四六 起きよ、往かん、視よ、我を付す者は近づけり。四七 彼が尚言ふ時、視よ、十二の一なるイウダは來り、劍と棒とを持てる多くの民、司祭諸長及び民の長老等より遣されし者は、彼と偕にせり。四八 イイススを付す者彼等に號を與へて曰へり、我が接吻せん者は 耶斯の人なり、彼を執へよと。四九 直にイイススに就きて曰へり、夫子、慶べよ、乃 彼に接吻せり。五〇 イイスス之に謂へり、友よ、胡爲れぞ來れる。其時彼等就きて、手をイイススに措きて、之を執へたり。五一 視よ、イイススと偕に在りし一人、手を伸べ、其劍を抜きて、司祭長の僕を撃ちて、其耳を削げり。五二 イイスス彼に謂ふ、爾の劍を其處に歸せ、蓋凡そ劍を執る者は劍にて亡びん。五三 或は爾は、我今我が父に求めて、彼をして我に十二軍餘の天使を遣しむること能はずと意ふか。五四 然らば聖書に、斯くあるべしと、言へること如何ぞ應はん。五五 其時イイスス民に謂へり、爾等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて、我を捕へん爲に出でたり、我日日殿の中に誨へて、爾等と偕に坐せしに、爾等我を執へざりき。五六 此れ皆成りしは、諸預言者の書に應ふを致す。其時門徒皆彼を遺てて奔れり。五七 イイススを執へたる

者彼を曳きて、司祭長カイアファの許に至れり、彼處には學士及び長老等已に集れり。五八 ペトル遠く彼に隨ひて、司祭長の中庭に至り、其竟を觀ん爲に内に入りて、下吏等と偕に坐せり。五九 司祭諸長、長老等、及び全公會は、イイススを死に致さん爲に、彼に對する妄證を求めたれども、六〇 得ざりき、多くの妄證者就きたれども、得ざりき。終に二の妄證者就きて曰く、六一 斯の言へり、我は神の殿を毀ち、三日にして之を建つるを能すと。六二 司祭長立ちて、彼に謂へり、爾答ふる所なきか、彼等が爾に對して證する所如何。六三 イイスス黙然たり。司祭長彼に謂へり、我活ける神を以て爾に誓はしむ、我等に告げよ、爾は神の子ハリストスなるか。六四 イイスス之に謂ふ、爾言へり、且我爾等に語ぐ、此より後、爾等は人の子が大能の右に坐し、天の雲に乗りて來るを見ん。六五 其時司祭長己の衣を裂きて曰へり、彼は神を瀆せり、何ぞ復證者を求めん、視よ、今爾等は其神を瀆すを聞けり。六六 爾等如何に意ふか。彼等答へて曰へり、死に當る。六七 是に於て彼等其面に唾し、彼を撃ち、或者は其頬を批ちて曰へり、六八 ハリストスよ、我等に預言せよ、爾を撃ちし者は誰ぞ。六九 時にペトル外に中庭に坐せるに、一人の婢彼に就きて曰く、爾もガリレヤのイイススと偕に在りき。七〇 然れども彼は衆の前に諱みて曰へり、我爾が言ふ所を識らず。七一 彼が門を出づる時、他の婢彼を見て、彼處に在る者に謂ふ、此の人

もイイススナゾレイと偕に在りき。七二 彼復諱みて、誓ひて曰へり、我其の人を識らず。七三 少頃ありて、彼處に立てる者近づきて、ペトルに謂へり、誠に爾も其黨の一人なり、蓋爾の言語も爾を顯す。七四 其時彼は詛ひ且誓へり、我其人を識らずと。忽 鶏鳴けり。七五 ペトルはイイススの彼に、鶏の鳴かざる先に、爾三次我を諱まんと、云ひし言を憶ひ起して、外に出でて、痛く哭けり。

第二十七章 一 平旦に及びて、司祭諸長と民の長老等と皆相會して、イイススの事を議せり、之を死に致さん爲なり。二 乃之を縛りて、曳きて、方伯ポンティイピラトに解せり。三 時に彼を賣りしイウダは其定罪せられたるを見て、悔いて、銀三十を司祭諸長と長老等とに返して曰へり、四 我辜なき血を付して、罪を犯せり。彼等曰へり、我等何ぞ與らん、自ら顧みよ。五 彼銀を殿に擲ちて出で、往きて自ら縊れたり。六 司祭諸長銀を取りて曰へり、之を殿の庫に納るるは宜しからず、是れ血の價なればなり。七 乃相議して、此を以て陶人の田を買ひ、賓旅を瘞る地と爲せり。八 故に其他は、今日に至るまで、血の田と稱へらる。九 是に於て預言者イエレミヤを以て言はれしこと應へり、曰く、彼等銀三十乃 値を附けられし者、即イズライリの諸子が値を附けし者の價を取りて、一〇 之を陶人の田の爲に與へたり、主の我に示ししが如しと。一一 イイスス方伯の前に

立ちしに、方伯彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。イイスス之に謂へり、爾言ふ。二 司祭諸長と長老等と彼を訴へしに、一も答へざりき。三 時にピラト彼に謂ふ、爾に對して證すること斯く多きを爾聞かざるか。四 彼其一言にも答へざりき、方伯甚 奇むに至れり。五 節斯には、方伯が民に一人の囚、其欲する所の者を釋す例ありき。六 其時ワラウワと名づくる著しき囚ありしが、一七 民の集りし時、ピラト之に謂へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲するか、ワラウワか、抑 ハリストスと稱ふるイイススか。一八 蓋娼嫉に因りて彼を解ししを知れり。一九 方伯が審判座に坐せる時、其妻人を遣して、之に謂へり、爾此の義人に何事をも爲す勿れ、蓋我今日夢の中に彼の爲に多く苦めりと。二〇 然るに司祭諸長と長老等とは民に唆めて、ワラウワを釋し、イイススを滅さんことを乞はしめたり。二一 方伯彼等に問ひて曰へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲する。彼等曰へり、ワラウワを。二二 ピラト曰く、然らば我はハリストスと稱ふるイイススに何を爲さんか。皆彼に謂ふ、十字架に釘せらるべし。二三 方伯曰へり、彼は何の悪を行ひしか。然れども彼等 愈號びて曰へり、十字架に釘せらるべし。二四 ピラトは何事も益なく、唯亂の滋起るを見て、水を取り、民の前に手を盪ひて曰へり、我此の義人の血に對して罪なし、爾等自ら顧みよ。二五 民皆對へて曰へり、其血は我

等及び我等の子孫に歸すべし。二六 其時ワラウワを彼等に釋し、イイススを鞭ちて、十字架に釘せんに爲に付せり。二七 時に方伯の兵卒イイススを曳きて、公廨に入れ、全營を彼の許に集め、二八 其衣を褫きて、絳き袍を衣せ、二九 棘の冕を編みて、其首に冠らせ、葦を其右の手に持たせ、彼の前に跪きて、彼に戯れて曰へり、イウデヤ人の王、慶べよ。三〇 又彼に唾し、葦を取りて、其首を撃てり。三一 既に戯れ畢りて、其袍を褫ぎ、故の衣を衣せ、十字架に釘せん爲に彼を曳き往けり。三二 出づる時、キリネヤの人シモンと名づくる者に遇ひ、之を強ひて、其十字架を負はしめたり。三三 ゴルゴフアと云ふ處、譯すれば、髑髏の處に來りて、三四 醋に膽を和へて、彼に飲ましめたるに、之を嘗めて、飲むことを欲せざりき。三五 彼を十字架に釘せし者は鬪を取りて、其衣を分ち、三六 而して坐して、彼處に彼を守れり。三七 又其罪を記せる標を其首の上に置けり。曰く、是れのイイスス、イウデヤ人の王と。三八 其時二人の盜賊は彼と偕に十字架に釘せられたり、一人は其右、一人は其左なり。三九 過ぐる者彼を誚り、首を揺かして曰へり、四〇 殿を毀ちて、三日に之を建つる者よ、己を救へ、若し爾神の子ならば、十字架より下れ。四一 同じく司祭諸長も、學士、長老、ファリセイ等と偕に嘲りて曰へり、四二 他人を救ひて、己を救ふ能はず、若し彼イスライリの王ならば、今十字架より下るべし、然らば我等彼を信ぜん。四三 神を恃

めり、若し神彼を悦ばば、今彼を拯ふべし、蓋彼は、我神の子なりと云へり。四四 彼と偕に十字架に釘せられたる盜賊も又彼を誚れり。四五 第六時より晦暝は全地を蔽ひて、第九時に至れり。四六 第九時の頃、イイスス大聲に呼びて曰へり、「イリ、イリ、ラマ、サワフア二」、即我が神よ、我が神よ、何ぞ我を遺てたる。四七 彼處に立てる者の中、或人之を聞きて曰へり、彼はイリヤを呼ぶなり。四八 其中の一人直に走り、海絨を取りて、醋を盈たし、葦に束ねて、彼に飲ましめたり。四九 餘の者曰へり、姑く舍け、イリヤ來りて、彼を救ふや否やを觀ん。五〇 イイスス復大聲に呼びて、氣絶えたり。五一 視よ、殿の幔は、上より下に至るまで裂けて、二となり、地震ひ、磐裂け、五二 墓啓けて、寝ねたる聖人の身は多く復活し、五三 彼の復活の後、墓より出でて、聖なる城に入り、多くの者に現れたり。五四 百夫長及び之と偕にイイススを守る者は、地震と有りし事とを見て、甚しく懼れて曰へり、此れ誠に神の子なり。五五 彼處に亦多くの婦ありて、遙に望めり、是れガリレヤよりイイススに従ひて、彼に事へたる者なり。五六 其中にマリヤ「マグダリナ」、イアコフ及びイオシヤの母マリヤ、又ゼウェデイの子の母ありき。五七 日暮るるに及びて、アリマフェヤの富める人、名はイオシフ、自も亦イイススに學びし者は來れり。五八 彼ピラトに就きて、イイススの屍を求めたれば、ピラト屍を與へんことを命ぜり。五九 イオシフ屍を取

りて、之を潔き布に裹み、六〇之を磐に鑿ちたる己の新なる墓に置き、大なる石を墓の門に轉して去れり。六一マリヤ「マグダリナ」と他のマリヤと彼處に在りて、墓に對ひて坐せり。六二明日即備節日の翌日司祭諸長とフアリセイ等とピラトの許に集りて謂へり、六三主よ、我等憶ひ起すに、彼の惑はす者尚生ける時、我三日の後に復活せんと言へり。六四是の故に命じて、三日に至るまで、墓を固めしめよ、恐らくは其門徒夜來たりて、彼を竊み、民に向ひて、彼は死より復活せりと言はん、然らば後の惑は先より更に甚しからん。六五ピラト彼等に謂へり、爾等に番兵あり、往きて、爾等の意に任せて、之を固めよ。六六彼等往きて、石に封印し、番兵をして、墓を固めしめたり。

第二十八章 一安息日過ぎて、七日の首の日の黎明に、マリヤ「マグダリナ」と他のマリヤと墓を觀ん爲に來れり。二視よ、地大に震へり、蓋主の使天より降り、就きて、墓の門より石を移して、其上に坐せり。三其容は電の如く、其衣は白きこと雪の如し。四守る者は彼を懼れ、戦きて、死せし者の如くなれり。五天使婦に對へて曰へり、爾等懼るる勿れ、我爾等が十字架に釘せられしイイススを尋ぬるを知る。六彼は此に在らず、蓋其言ひし如く、復活せり、來りて、主の置かれし處を觀よ、七且速に往きて、其門徒に告げて曰

へ、彼死より復活せり、爾等に先だちてガリレヤに往く、爾等彼處に於て彼を見んと、視よ、我爾等に言へり。八婦急ぎて、墓を離れ、懼れ且大に喜びて、其門徒に報ぜん爲に趨り往けり。九彼等が門徒に報ぜん爲に往ける時、視よ、イイスス之に遇ひて曰へり、慶べよ、彼等就きて、其足を抱きて、彼を拜せり。一〇イイスス之に謂ふ、懼るる勿れ、往きて、我が兄弟に報じて、ガリレヤに往かしめよ、彼等彼處に於て我を見ん。一一婦の往く時、視よ、番兵の中の或者城に入りて、有りし事を以て、悉く司祭諸長に告げたり。一二彼等は長老等と與に集り相議して、多くの銀を兵卒に給へて二三曰へり、爾等云へ、我等が寝ねたる時、其門徒夜來りて、彼を竊めりと、一四若し此の事方伯に聞えば、我等、彼に勸めて爾等に虞なからしめん。一五彼等銀を取りて、教へられし如く行ひたり、是に於て斯の言はイウデヤ人の中に傳はりて、今日に至れり。一六十一の門徒ガリレヤに往きてイイススの彼等に命ぜし山に至り、一七彼を見て拜せり、然れども猶疑へる者ありき。一八イイスス就きて、彼等に語げて曰へり、天に在り地に在る一切の權は我に與へられたり、一九故に爾等往きて、萬民に教を傳へて、彼等に父と子と聖神との名に因りて洗を授け、二〇彼等を教へて、我が一切爾等に命ぜしことを守らしめよ、視よ、我恒に爾等と偕にして世の終末まで在るなり、「アミン」。

